本講座は大学入学共通テストで90％の得点を目標としています。

大学入学共通テストの現代文といえば

「図やグラフが出るんでしょ」
「実用的な文章が出るんでしょ」
「今までの現代文と全然違うんでしょ」

と思っている人もいると思います。しかし、大学入学共通テストも「現代文」であることは間違いありません。ですから、その対策も何か特別な知識が必要だということもありません。今までの現代文学習の延長線上に「大学入学共通テスト」はあります。

「大学入学共通テストの現代文は変わっている」
という常識を覆すのがこの講座です。

本講座を終えたとき
「なんだ、大学入学共通テストなんて二次試験や難関私大の問題に比べたら簡単だ」
と思えるように講義をしていきます。

この講座で、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講座の現代文の考え方

本講座は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の３つです。

①　文法

②　構文

③　論理

たとえば、**①文法**ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、**②構文**ですが、本講座では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、**③論理**ですが、ここが本講座の最大の特徴です。**①文法**や**②構文**は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、**③論理**は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといって良いでしょう。数式が世界共通の言語であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講座では論理を以下の**「４つの言葉のルール」と「その使い方」**と定義します。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書いています。ですから、読者もそのルールを理解して読まなければなりません。本講座ではその「ルール」と「使い方」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講座の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講座の利用法

最高の講座を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習・復習について

この講座を受ける前に、予習として自分の力で問題を解答してみてください。はじめは時間制限なしでも構いません。共通テストの問題は解く手順が重要です。講座の中で効果的な読み方・解き方を説明していますので、自分の解き方と比較しましょう。講座を受けた後には、復習として学んだ読み方・解き方を実践しながら、もう一度問題に取り組みましょう。

重要　**講座の中で説明される解き方・読み方を実践する。**

よく「現代文は復習しなくても良い」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくて良い」なら復習して覚えるべきポイントがない「講座」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講座は復習してほしいポイントを用意しています。

ポイントをしっかり覚えてください。現代文を分析する上で必要になる考え方です。

重要 復習のポイントを押さえる。

Ⅱ　講座について

本講座は「本文を図にまとめたパート」と「本文テキストへの書き込みを説明するパート」の構成が基本となっています。本文を図にまとめている部分は本文の下のメモ欄に書き込みましょう。もう一方のテキストの画面では、本文に「線引き」をしてください。その際に「なぜそこに線を引くのか」を説明するので、その説明もメモしましょう。

重要　**本文に線引きをする。説明や図はメモ欄に書く。**

目次

論理的文章
第１講　評論対策　その１……p 1
第２講　評論対策　その２……p 19
文学的文章
第３講　小説対策　その１……p 35
第４講　小説対策　その２……p 51
実用的文章
第５講　実用文対策　その１……p 67
第６講　実用文対策　その２……p 79
巻末付録
読解法一覧……p 101
傍線部内容説明問題解法……p 122
傍線部理由説明問題解法……p 125
傍線部心情把握問題解法……p 133

第１講　評論対策　その１

第１問

次の文章は、高岡文章（たかおかふみあき）「観光は『見る』ことである／ない――『観光のまなざし』をめぐって」の一部で、ジョン・アーリをはじめとする研究者の見解をふまえて書かれたものである。これを読んで、後の問い（**問１～６**）に答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。（配点　45）

アーリは「文化的なメガネ」という卓抜な表現をもちいて、見ることの社会性を明るみにだしている。まなざしの枠組は規範や様式といった社会／文化的な制度によって規定されているのであって、決して個人が自由に個性的に対象をまなざしている訳ではない。鈴木涼太郎によれば、ベトナムを訪れる日本人が観光みやげとして好むのは「ベトナムの伝統文化」を表象する手作りザッ(ア)カであるのに対し、欧米からの観光客は「東洋文化」を表象する美術品としての大型の壺を求めるという。ここでは観光者が所属する社会によって、訪問地へのまなざしが異なっているのだ。

山口誠はグアムを訪れる日本人観光客の多くが楽園やリゾートといったグアム的記号にあふれたタモン湾から一歩も出ず、その周囲にひろがる多様な現実への想像力から目を背けていると指摘する。人はフレームをとおしてものを見る。何かを「見る」ことは、他の何かを「見ない」ことでもある。まなざしには常に選別がともなっている。

まなざしの線引きをおこなっているのはゲストだけではない。橋本和也は観光者が期待

メモ欄

する（押しつける）イメージに適合的な役割を観光地住民が再演することは、観光という荒波から自らの生活文化を守るためのホスト側の「戦略」でもあるという。

「刹那的(注1)」であると同時に（であるがゆえに）対象に魅力を感じるという観光のまなざしの暴力性はとどまるところがない。一九世紀から二〇世紀にかけて世界各地でおこなわれた万国博覧会(注2)では、植民地住民の「展示」がおこなわれた。悪名高い「人間動物園」である。見る主体（多くは西洋の男性）と見られる客体（多くは非西洋の女性）のあいだには乗り越えがたい線が引かれていて、まなざしは境界線の恣意性を見えづらくし、その権力性を再生産する役割を果たす。

　近代以前の刑罰は多くの場合、見せしめのためにおこなわれ、それは格好の「見世物」であった。現代でもダークツーリズム(注3)と名を変えて、おぞましいものへの欲望が観光（の一部）を支えている。それゆえA観光地住民の「戦略」は常に綱渡りである。アメリカの社会学者ディーン・マキャーネルが『ザ・ツーリスト』で指摘したように、観光者は「演出」に飽き足らずその「舞台裏」を見たがるのだから。ありのままを見せる生活観光は、出口の見えない隘路(あいろ)(注4)でもあるだろう。そこでは観光のまなざしが全域化していく。

　B観光において「見る」ことは問題含みであるだけでなく、とくに「する」こととの対比において、価値のないものとみなされてもきた。

　見る主体と見られる客体という、乗り越えがたい（ようにみえた）関係性は、意外な形で反転する。観光者がまなざすのは、たいてい（自分以外の）人びとの生活実践やその痕跡である。偉大な芸術、壮大な遺跡、珍しい風習、初めて出会う食文化などなど。観光の場面において彼らは「見るだけ」のよそ者だ。ここでは見られる側、つまり生活「する」

メモ欄

側が主役であり、それを「見る」側は観客にすぎない。文化人類学や地域社会学、環境社会学による地域研究／観光研究は、生活者の視点にウエイトを置く。その土地に暮らし働く人びとこそが当事者なのであり、彼らの生活や文化を覗（のぞ）くために訪れて、そそくさと立ち去っていく観光者たちは招かれざる客として位置づけられてきた。

　観光のまなざしにおける消費主義や薄っぺらさを鋭く批判したのはブーアスティンだった。一九世紀のなかばに旅行が変容したと彼は述べる。かつての旅人（トラベラー）が没落したかわりに観光客（ツーリスト）が台頭した。それは、旅行が「自分のからだを動かすスポーツから、見るスポーツへと変化した」ことを意味していた。「する」から「見る」への転換。旅は能動的で命がけの行為から、購入するだけのお気楽な商品へと、「無意味」で「空虚」なものへと成りさがったと彼は考えたのだった。

　ブーアスティンの嘆きを時代錯誤と笑うことはたやすい。彼の観光論は、あたかも理想的で「ほんとうの」旅がどこかに存在するかのような幻想にさいなまれているというのが、後続の観光研究におけるお定まりの批判なのであるが、Cことはそれほど単純でもない。

　表層的な観光のありかたへの飽き足らなさや批判は、現実に観光の形を大きく変えてきた。従来の大衆観光が観光地社会への無理解や無関心といった特徴を帯びていたのに対して、二〇〇〇年以降、新しい観光／オルタナティヴ・ツーリズムが提唱され実践されてきたのだ。キーワードは「体験」「交流」「学習」である。地元住民の案内によって現地を歩きながら「ほんもの」の歴史や文化を学んだり、農村や漁村の民家に宿泊して「その土地ならでは」の生活を体験したりするような、活動的なプログラムが提供されている。「見

メモ欄

る」観光から「する」観光への転換は、個人旅行のみならず、こんにちでは修学旅行をはじめとする団体旅行においてすら主要なメニューとなりつつある。冒頭[注5]に述べた京都祇園（ぎおん）の着物観光は、このような動向の延長線上においてこそ、よりよく理解することができるだろう。

近年、観光現象だけでなく観光研究の視座までもが更新を迫られるようになった。研究対象としての観光が「見る」から「する」へと変化しただけではない。そもそも観光は、はたしてほんとうに「見る」ことだったのかという根本的な問いが突きつけられている。たとえばアルン・サルダンハはアーリのまなざし論を批判して、「観光者は、泳がないのか、山へ登らないのか、サン(イ)サクしないのか、スキーをしないのか」との疑問を(ウ)テイした。

観光研究は、アーリのまなざし論を乗り越えるべく理論的な発展を試みてきた。観光における身体性やふるまいを重視する視点を「パフォーマンス的転回」と呼ぶ。視覚のみならず嗅覚や聴覚、触覚、味覚など多様な感覚との連関において観光をとらえたり、観光者の身体性やしぐさ、パフォーマンスに分析の力点を傾けたりするような研究が積み重ねられてきた。アーリ自身もヨーナス・ラースンの助力をえて改訂した『観光のまなざし』第三版にパフォーマンスをめぐる章を設け、観光（研究）におけるパフォーマンス概念の重要性に注意を促すにいたっている。

観光はもはや「見る」ことだけで説明できるほど素朴な行為ではない。とはいえ、アーリとラースンは、視覚でどこまで説明できるかといえば「それには限界がある」と認めつつも、「視覚が観光体験の中心にある」と食い下がる。彼らにしたがえば「見る」か「す

メモ欄

る」かの二者択一は不毛なのであって、まなざしとパフォーマンスはD「ともに踊る」関係なのだ。観光のまなざし論はパフォーマンス的転回によって(エ)イッソウされたのではなく、それを取り込みつつ生き長らえる。

かつて、人類学者たちは調査地に観光客が訪れることを毛嫌いしてきた。「文明に毒されていない」「未踏の」伝統文化こそを欲望するまなざしは、下世話な観光客たちを巧妙に排除してきたのだ。「観光者を見ない技術」は私たちにも心当たりがあるだろう。海外で出会う日本人観光客をあえて見ないふりをしたり、「誰もない風景」をカメラにおさめるために観光客が通り過ぎるのを待ち続けたりといった経験をしたことはないだろうか。ここでは、アーヴィング・ゴフマンのいう「儀礼的無関心」が駆使されていて、互いが互いの観光を邪魔しないよう高度なコミュニケーションが交わされている。

他方、「観光者を見る技術」も巧みにもちいられている。アーリは、山の頂上や森の奥など、他の観光者がいないことがその場所の観光的価値を高めるような状況を「ロマン主義的まなざし」と呼び、それに対して、他の観光者も同じ場所に来ているという事実がその場所の観光的価値を高める状況を「集合的まなざし」と呼んだ。後者においては、他者の存在が愉快さ、祝祭的気分、活況を与える。

他者を排除するまなざしにしても、それを取り込むまなざしにしても、ここでは他者の身体性が問題となっている。吉見俊哉は『都市のドラマトゥルギー』のなかで、都市を歩く人の身体性にいち早く言及していた。一九七三年にパルコ(注6)が渋谷・公園通りに開店した際のキャッチコピーは「すれ違う人が美しい」であった。パルコは渋谷という都市を舞台、そこを歩く人びとを主役と見立てて都市空間を演出した。渋谷を訪れる若者たちがま

メモ欄

なざしたのは、資本が演出する記号のみならず、それらと E「ともに踊る」身体なのであった。吉見によれば、都市は「「見ること」と「見られること」を媒介する役割」を果たしていた。

ゲストは他のゲストからだけでなくホストからも「見られ」ている。ダリヤ・マオズは観光者が地元住民をまなざすとともに地元住民も観光者をまなざすのだと述べて、それを「相互のまなざし」と名づけた。こんにち、京都でバルセロナでヴェネツィアで、オー[注7]バーツーリズムの張本人として観光者は冷たい視線を浴びせられている。新型コロナウイルス感染症の流行は、観光者をこの世界で最も(オ)イまわしい存在とみなした。

F 観光における「見る／見られる」を考えるうえで、サファリパークは示唆的である。動物のリアルな生態に肉迫するべく、人びとは車に乗り込んで特等席を確保する。動物たちは車に群がり、物欲しげに人間をまなざす。人間はふたたび動物園の檻（おり）に閉じ込められて、まなざしの対象となる。かつての万国博覧会とは違って、彼らを見ているのはもはや人間ではない。

（注）

1　「刹那的」であると同時に（であるがゆえに）対象に魅力を感じるという観光のまなざし――本文より前のところで、歴史学者のヴォルフガング・シヴェルブシュが、鉄道が人間にもたらした知覚のあり方について「対象をその刹那的性格のゆえに、逆に魅力あるものと見なす知覚」と指摘したことが紹介されており、こうした知覚のあり方が観光のまなざしにも見られることが述べられている。

2　万国博覧会――複数の国々が一つの場所に集い、自国の技術や生産品を展示する催し。

3　ダークツーリズム――戦跡など、人びとを襲った不幸や悲劇にまつわる場所を観光地として訪れること。

メモ欄

4　隘路――狭くて通りにくい通路。
5　冒頭に述べた京都祇園の着物観光――本文を含む論考全体の冒頭で、観光客がレンタル着物に身を包み、祇園を歩く様子が紹介されている。
6　パルコ――東京都渋谷区にある複合商業ビル。若者文化を発信する拠点とされた。
7　オーバーツーリズム――観光客の著しい増加によって、住民の生活や自然環境が脅かされること。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］～［5］。

(ア)　ザッカ　［1］

① 米のカカクが変動する
② 機械をカドウさせる
③ ガイカを獲得する
④ 他人に責任をテンカする

(イ)　サンサク　［2］

① 葡萄（ぶどう）をアッサクする
② サクボウをめぐらす
③ 文章をテンサクする
④ 解決の道をモサクする

(ウ)　テイした　［3］

① オンテイを合わせる
② 記念品をゾウテイする
③ セケンテイが悪い
④ ゼンテイ条件を確認する

メモ欄

(エ)　イッソウ　4

①　店内のカイソウ工事を行う
②　ソウゴンな建物
③　事件のソウサに協力する
④　床をソウジする

(オ)　イまわしい　5

①　古くからのキンキを犯す
②　キキ迫る演技
③　キグの念を抱く
④　大会をキケンする

メモ欄

問２　傍線部Ａ「観光地住民の『戦略』は常に綱渡りである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 観光者の持つイメージを受け入れることで自らの文化を維持しようとする観光地住民の「戦略」は、観光者のまなざしが観光者の所属する社会の制度に規定されているために、他者の文化の受容を強いられかねないということ。

② 何をどこまで見たり見なかったりするかという観光者の選別に対応していく観光地住民の「戦略」は、観光者の恣意によって観光の対象が変わるために、そのまなざしにもてあそばれる事態を招きかねないということ。

③ ありのままの現実を見たがる観光者に寄り添おうとする観光地住民の「戦略」は、おぞましい部分を好んで観光の対象とする観光者のまなざしのために、観光地住民が自らの手でその生活をゆがめてしまいかねないということ。

④ 自らの生活文化を守るために観光者の期待に応えて演技をする観光地住民の「戦略」は、演出の裏側をも見ようとする観光者の欲望のために、観光者が期待するものを際限なく生活のなかで見せていくことになりかねないということ。

メモ欄

問３　傍線部Ｂ「観光において『見る』ことは問題含みであるだけでなく、とくに『する』こととの対比において、価値のないものとみなされてもきた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 観光研究が土地に暮らす人々の生活を覗くためだけに観光地を訪れる観光者を批判し、また、ブーアスティンが旅に命をかけてきた旅人に意味を見出（みいだ）したことによって、「見る」主体の位置づけに変化が生じたということ。

② 観光で重視すべきは観光地住民の生活を体験することであり、旅行は本来「する」ものであるということが、観光研究やブーアスティンによって指摘されたことで、観光における「見る」ことの役割が後退したということ。

③ その土地に暮らす当事者の視点を重視した観光研究によって観光者はよそ者として位置づけられ、能動的な旅を充実したものと捉えるブーアスティンによって「見る」だけの観光が軽薄なものと考えられたということ。

④ 自らの生活や文化に価値を認める生活者の視点を重視する観光研究と、「する」から「見る」への旅行の変容を嘆くブーアスティンの見解が重なることで、「見る」側の観光者が無意味な存在に貶（おとし）められたということ。

メモ欄

問４　傍線部Ｃ「ことはそれほど単純でもない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 表層的な観光への不満や批判が、その土地の生活を体験するプログラムを人気の観光商品に押し上げることにつながり、さらにこうした変化をふまえることで、多様な感覚との連関において観光を捉える観光研究の方法が構想されることになったから。

② 表層的な観光への不満や批判が、観光地の生活を覗くだけの観光から観光地社会の実際を体験しようとする観光への転換を促し、さらにこうした変化と並行して、観光者のふるまいに注意を向けるようなかたちで観光研究の着眼点が改められていったから。

③ 表層的な観光への不満や批判が、かつての旅人による能動的な旅を再現する観光を要求することにつながり、さらにこうした変化に呼応して、観光は「見る」ことだけで説明できる行為ではないという新たな認識を観光研究にもたらすことになったから。

④ 表層的な観光への不満や批判が、観光地社会に対する無理解さを反省した新しい観光を実践することにつながり、さらにこうした変化を受けて、観光地に対して観光者が正しくまなざしを向ける方法を探求するような観光研究の創出につながったから。

メモ欄

問５　傍線部Ｄ「『ともに踊る』」はアーリとラースンの『観光のまなざし』第三版からの引用表現であり、筆者は傍線部Ｅ「『ともに踊る』」でその表現を再度用いている。これらの表現の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 傍線部Ｄでは観光研究においてまなざしとパフォーマンスが重要な視点であることを表し、傍線部Ｅでは都市の研究において商業施設と若者の身体が都市という舞台を考えるうえでともに重要な対象であることを表している。このように「ともに踊る」という表現は、複数の視点を組み合わせることにより新しい研究が可能になることを示している。

② 傍線部Ｄでは観光におけるまなざしが観光者の身体と関わって成り立っていることを表し、傍線部Ｅでは都市を彩るイメージと人々の身体がともに都市という舞台を形作っていることを表している。このように「ともに踊る」という表現は、「見る」人が見るだけではなく、行為する存在でありかつ他者のまなざしの対象でもあることを示している。

③ 傍線部Ｄでは他の観光者とともにあることが観光地の価値を高めるという観光のあり方を表し、傍線部Ｅでは都市を歩く人とそれにまなざしを向ける若者の存在とが都市の魅力を高めている様子を表している。このように「ともに踊る」という表現は、他者の身体とそれを「見る」人がともに観光地や都市の価値を高めていることを示している。

メモ欄

④ 傍線部Ｄでは「見る」人と「する」人とが互いに高度なやり取りを行っている観光体験のありようを表し、傍線部Ｅでは「見る」人と「見られる」人とがともに行き交う都市空間のありようを表している。このように「ともに踊る」という表現は、ふるまいとまなざしとの区別や主役と観客との区別が分かちがたいものであることを示している。

メモ欄

問６　傍線部Ｆ「観光における『見る／見られる』を考えるうえで、サファリパークは示唆的である。」とあるが、文章中に示された「見る／見られる」の事例との関係において、サファリパークはどのような意味で「示唆的」であると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［10］。

① グアムなどのリゾートでは、ゲスト側の「文化的なメガネ」を通したまなざしがホスト側に押しつけられる。一方でサファリパークでは、見る主体である人間の欲望と、物欲しげに人間を眺める動物の欲望との違いが現れる。このようにサファリパークは、ゲスト側のまなざしとホスト側のまなざしとの非対称性を考えさせる点で示唆的である。

② 植民地住民の「展示」では、見る主体と見られる客体が恣意的に固定される。一方でサファリパークでは、見る主体である人間が動物の暮らす場に入っていくことで、動物の欲望のまなざしにさらされる客体にもなる。このようにサファリパークは、見られる側に強いられる一方的なまなざしが、見る側にも向けられる場である点で示唆的である。

③ 観光研究では、見られる側の観光地住民の生活が重視され、見る側の観光者はそそくさと立ち去るよそ者とみなされる。同様にサファリパークにおいても、主役はそこに暮らす動物であり、人間は観察者として通り過ぎるだけの存在である。このようにサファリパークは、見る側の観光者が「招かれざる客」であることを想起させる点で示唆的である。

メモ欄

④　観光の現場では、観光者は他の観光者を見る存在であると同時に他の観光者から見られる存在でもある。同様にサファリパークでも、動物を見る他の客の邪魔をしないよう注意を払ったり、他の客と一緒に動物を観察しようとしたりする。このようにサファリパークは、観光者相互のコミュニケーションのあり方に注意を促す点で示唆的である。

「大学入学共通テスト」２０２５年度本試験より

メモ欄

■2025年度 本試験

問題番号（配点）	設問	解答番号	正解	配点
第1問（45）	1	1	3	2
		2	2	2
		3	2	2
		4	4	2
		5	1	2
	2	6	4	7
	3	7	3	7
	4	8	2	7
	5	9	2	7
	6	10	2	7

〈 Memo 〉

第2講　評論対策　その2

第1問

次の文章は、近年さまざまな分野で応用されるようになった「レジリエンス」という概念を紹介し、その現代的意義を論じたものである。これを読んで、後の問い（問1〜6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 〜 14 の番号を付してある。（配点　50）

1 環境システムの専門家であるウォーカーは、以下のような興味深い比喩を持ち出している。

2 あなたは、港に停泊しているヨットのなかでコップ一杯の水を運んでいるとしよう。そして、同じことを荒れた海を航海しているときに行ったとしよう。港に停泊しているときにコップの水を運ぶのは簡単である。この場合は、できるだけ早く、しかし早すぎないように運べばよいのであって、その最適解は求めやすい。しかし、波風が激しい大洋を航海しているときには、早く運べるかどうかなど二の次で、不意に大きく揺れる床の上で転ばないでいることの方が重要になる。あなたは、膝を緩め、突然やってくる船の揺れを吸収し、バランスをとらねばならない。海の上での解は、妨害要因を吸収する能力を向上させることをあなたに求める。すなわち、波に対するあなたのレジリエンスを向上させることを求めるのである。

メモ欄

3 この引用で言う「レジリエンス（resilience）」とは、近年、さまざまな領域で言及されるようになった注目すべき概念である。この言葉は、「攪乱（かくらん）を吸収し、基本的な機能と構造を保持し続けるシステムの能力」を意味する。

4 レジリエンスの概念をもう少し詳しく説明しよう。レジリエンスは、もともとは物性[注1]科学のなかで物質が元の形状に戻る「弾性」のことを意味する。六〇年代になると生態学や自然保護運動の文脈で用いられるようになった。そこでは、生態系が変動と変化に対して自己を維持する過程という意味で使われた。しかし、ここで言う「自己の維持」とは単なる物理的な弾力のことではなく、環境の変化に対して動的に応じていく適応能力のことである。

5 レジリエンスは、回復力（復元力）、あるいは、サステナビリティ[注2]と類似の意味合いをもつが、A <u>そこにある微妙な意味の違い</u>に注目しなければならない。たとえば、回復とはあるベースラインや基準に戻ることを意味するが、レジリエンスでは、かならずしも固定的な原型が想定されていない。絶えず変化する環境に合わせて流動的に自らの姿を変更しつつ、それでも目的を達成するのがレジリエンスである。レジリエンスは、均衡状態に到達するための性質ではなく、発展成長する動的過程を(ア)<u>ソクシン</u>するための性質である。

6 また、サステナビリティに関しても、たとえば、「サステナブルな自然」といったときには、唯一の均衡点が生態系のなかにあるかのように期待されている。しかしこれは自然のシステムの本来の姿とは合わない。レジリエンスで目指されているのは、ケン

メモ欄

(イ)コウなダイナミズム(注3)である。レジリエンスには、適度な失敗が最初から包含されている。たとえば、小規模の森林火災は、その生態系にとって資源の一部を再構築し、栄養を再配分することで自らを更新する機会となる。こうした小規模の火災まで防いでしまうと、森林は燃えやすい要素をため込み、些細(ささい)な発火で破滅的な大火災にまで発展してしまう。

7 さらに八〇年代になると、レジリエンスは、心理学や精神医学、ソーシャルワーク(注4)の分野で使われるようになった。そこでは、ストレスや災難、困難に対処して自分自身を維持する抵抗力や、病気や変化、不運から立ち直る個人の心理的な回復力として解釈される。

8 たとえば、フレイザー(注5)は、ソーシャルワークと教育の分野におけるレジリエンスの概念の重要性を主張する。従来は、患者の問題を専門家がどう除去するかという医学中心主義的な視点でソーシャルワークが行われていた。患者の問題の原因は患者自身にあるとされ、患者を治療する専門家にケアの方針を決定する(ウ)ケンゲンが渡された。こうして患者は医師に依存させられてきた。これに対して、レジリエンスに注目するソーシャルワークでは、患者の自発性や潜在能力に着目し、患者に中心をおいた援助や支援を行う。

9 フレイザーのソーシャルワークの特徴は、人間と社会環境のどちらかではなく、その間の相互作用に働きかけることにある。クライエント(注6)の支援は、本人の持つレジリエンスが活(い)かせる環境を構築することに焦点が置かれる。たとえば、発達障害のある子どもに対して、特定の作業所で務められるような仕事をどの子どもにも同じように教えるこ

メモ欄

とは妥当ではない。そうすると身につけられる能力が(エ)カタヨって特定の作業所に依存してしまい、学校から作業所へという流れの外に出ることができなくなる。それでは一種の隔離になる。子どもの潜在性に着目して、職場や環境が変わっても続けられる仕事につながるような能力を開発すべきである。

10　B ここでレジリエンスにとって重要な意味をもつのが、「脆弱性（ぜいじゃく）（vulnerability）」である。通常、脆弱性はレジリエンスとは正反対の意味を持つと考えられている。レジリエンスは、ある種の(オ)ガンケンさを意味し、脆弱性とは回復力の不十分さを意味するからである。しかし見方を変えるなら、脆弱性は、レジリエンスを保つための積極的な価値となる。なぜなら、脆弱性とは、変化や刺激に対する敏感さを意味しており、このようなセンサーをもったシステムは、環境の不規則な変化や攪乱、悪化にいち早く気づけるからである。たとえば、災害に対して対応力に富む施設・建築物を作り出したいのなら、障害者や高齢者、妊娠中の女性にとって避難しやすい作りにすることが最善の策となる。

11　さらに、近年のエンジニアリング(注7)の分野においては、レジリエンスは、安全に関する新しい発想法として登場した。レジリエンス・エンジニアリングとは、複雑性を持つ現実世界に対処できるように、適度な冗長(注8)性を持ち、柔軟性に富んだ組織の能力を高める方法を見いだすものである。エンジニアリングの分野では、レジリエンスは、環境の変化に対して自らを変化させて対応する柔軟性にきわめて近い性能として解釈される。

12　以上のように、レジリエンスという概念に特徴的なことは、それが自己と環境の動的な調整に関わることである。回復力とは、システムどうしが相互作用する一連の過程か

メモ欄

ら生じるものであり、システムが有している内在的性質ではない。レジリエンスの獲得には、当人や当該システムの能力の開発のみならず、その能力に見合うように環境を選択したり、現在の環境を改変したりすることも求められる。レジリエンスは、複雑なシステムが、変化する環境のなかで自己を維持するために、環境との相互作用を連続的に変化させながら、環境に柔軟に適応していく過程のことである。

13 レジリエンスがこうした意味での回復力を意味するのであれば、C それをミニマルな福祉の基準として提案できる。すなわち、ある人が変転する世界を生きていくには、変化に適切に応じる能力が必要であって、そうした柔軟な適応力を持てるようにすることが、福祉の目的である。福祉とは、その人のニーズを充足することである。ニーズとは人間的な生活を送る上で必要とされるものである。ニーズを充足するには他者から与えられるものを受け取るばかりではなく、自分自身でそのニーズを能動的に充足する力を持つ必要がある。そうでなければ、自律的な生活を継続的に送れないからである。

14 レジリエンスとは、自己のニーズを充足し、生活の基本的条件を維持するために、個人が持たねばならない最低限の回復力である。人間は静物ではなく、生きている。したがって、傷ついて、病を得て、あるいは、脆弱となって自己のニーズを満たせなくなった個人に対してケアする側がなすべきは、物を修復するような行為ではないし、単に補償のための金銭を付与することでもない。物を復元することと、生命あるものが自己を維持することとはまったく異なる。生命の自己維持活動は自発的であり、生命自身の能動性や自律性が要求される。したがって、ケアする者がなすべきは、さまざまに変化する環境に対応しながら自分のニーズを満たせる力を獲得してもらうように、本人を支援

メモ欄

することである。

（河野哲也『境界の現象学』による）

（注）
1　物性科学――物質の性質を解明する学問。
2　サステナビリティ――持続可能性。「サステイナビリティ」と表記されることも多い。後出の「サステナブルな」は「持続可能な」の意。
3　ダイナミズム――動きのあること。
4　ソーシャルワーク――社会福祉事業。それに従事する専門家が「ソーシャルワーカー」。
5　フレイザー――マーク・W・フレイザー（一九四六―　）。ソーシャルワークの研究者でレジリエンスの提唱者。
6　クライエント――相談者、依頼人。「クライアント」ともいう。
7　エンジニアリング――工学。
8　冗長性――ここでは、余裕を持たせておくこと。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［１］～［５］。

(ア)　ソクシン　［１］

①　組織のケッソクを固める
②　消費の動向をホソクする
③　自給ジソクの生活を送る
④　返事をサイソクする

(イ)　ケンコウ　［２］

①　ショウコウ状態を保つ
②　大臣をコウテツする
③　コウオツつけがたい
④　ギコウを凝らした細工

(ウ)　ケンゲン　［３］

①　マラソンを途中でキケンする
②　ケンギを晴らす
③　実験の結果をケンショウする
④　セイリョクケンを広げる

メモ欄

(エ)　カタヨって　4

① 雑誌をヘンシュウする
② 世界の国々をヘンレキする
③ 図書をヘンキャクする
④ 国語のヘンサチが上がった

(オ)　ガンケン　5

① タイガンまで泳ぐ
② ドリルでガンバンを掘る
③ 勝利をキガンする
④ ガンキョウに主張する

メモ欄

問２　傍線部Ａ「そこにある微妙な意味の違い」とあるが、どのような違いか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 回復力やサステナビリティは戻るべき基準や均衡状態を期待するが、レジリエンスは環境の変化に応じて自らの姿を変えていくことを目指すという違い。

② 回復力やサステナビリティは環境の変動に応じて自己を更新し続けるが、レジリエンスは適度な失敗を繰り返すことで自らの姿を変えていくという違い。

③ 回復力やサステナビリティは生態系の中で均衡を維持する自然を想定するが、レジリエンスは均衡を調整する動的過程として自然を捉えるという違い。

④ 回復力やサステナビリティは原型復帰や均衡状態を目指すが、レジリエンスは自己を動的な状態に置いておくこと自体を目的とするという違い。

メモ欄

問３　傍線部Ｂ「ここでレジリエンスにとって重要な意味をもつのが、『脆弱性（vulnerability）』である。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［７］。

① 近年のソーシャルワークでは、人の自発性や潜在能力に着目して支援を行う。そのとき脆弱性は、被支援者が支援者にどれだけ依存しているかを測る尺度となるため、特定の人物に過度の依存が起こらない仕組みを作るにあたって重要な役割を果たすということ。

② 近年のソーシャルワークでは、被支援者の適応力を活かせるような環境を構築する。そのとき脆弱性は、環境の変化に対していち早く反応するセンサーとして働くため、非常時に高い対応力を発揮する施設や設備を作る際などに重要な役割を果たすということ。

③ 近年のソーシャルワークでは、人間と環境の相互作用に焦点を置いて働きかける。そのとき脆弱性は、周囲の変化に対する敏感なセンサーとして働くため、人間と環境の双方に対応をうながし、均衡状態へと戻るための重要な役割を果たすということ。

④ 近年のソーシャルワークでは、人と環境の復元力を保てるように支援を行う。そのとき脆弱性は、人の回復力が不十分な状態にあることを示す尺度となるため、障害者や高齢者などを支援し日常的な生活を取り戻す際などに重要な役割を果たすということ。

メモ欄

問４　傍線部Ｃ「それをミニマルな福祉の基準として提案できる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。
解答番号は 8 。

① 個人が複雑な現実世界へ主体的に対応できるシステムを、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者が主体的に対応できるよう必要な社会体制を整備することが求められるということ。

② 個人がさまざまな環境に応じて自己の要求を充足してゆく能力を、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者がその能力を身につけるために補助することが求められるということ。

③ 個人が環境の変化の影響を受けずに自己のニーズを満たせることを、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者が自己のニーズを満たすための手助けをすることが求められるということ。

④ 個人が環境の変化の中で感じたニーズを満たすことを、福祉における最小の基準とすることができる。これに基づいて、支援者には被支援者のニーズに応えて満足してもらえるよう尽力することが求められるということ。

メモ欄

問5　次に示すのは、本文を読んだ後に、三人の生徒が話し合っている場面である。本文の趣旨を踏まえ、空欄に入る発言として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［9］。

教　師――この文章の主題はレジリエンスでしたね。ずいぶん専門的な事例がたくさん挙げられていましたが、ここで説明されていることを、皆さん自身の問題として具体的に考えてみることはできないか、グループで話し合ってみましょう。

生徒A――最初に出てくるヨットのたとえ話は比較的イメージしやすかったな。ここで説明されていることを、もう少し身近な場面に置きかえてみればいいのかな。

生徒B――海の様子しだいで船の中の状況も全然違ってくるという話だったよね。環境の変化という問題は私たちにとっても切実だよ。［4］段落に「自己の維持」と書かれているけど、このごろは、高校を卒業して新しい環境に入っても、今までのように規則正しい生活習慣をしっかり保ち続けられるかどうか、心配していたところなんだ。

生徒C――そういうことだろうか。この文章では、さまざまに変化する環境の中でどんなふうに目的に向かっていくか、ということが論じられていたんじゃないかな。［5］段落には「発展成長する動的過程」ともあるよ。こういう表現は何だか私たちのような高校生に向けられているみたいだね。

メモ欄

生徒A――たしかにね。[空欄]

生徒B――なるほど。「動的」ってそういうことなのか。少し誤解してたけど、よくわかった気がするよ。

① 私が部活で部長を引き継いだとき、以前のやり方を踏襲したのにうまくいかなかったんだ。でも、新チームで話し合って現状に合うように工夫したら、目標に向けてまとまりが出てきたよ。

② 授業の時間でも生活の場面でも、あくまで私たちの自由な発想を活かしていくことが大切なんだね。そうすることで、ひとりひとりの個性が伸ばされていくということなんじゃないかな。

③ 私たちが勉強する内容も時代に対応して変化しているんだよね。だからこそ、決まったことを学ぶだけでなく、将来のニーズを今から予想していろんなことを学んでおくのが重要なんだよ。

④ 環境の変化に適応する能力は大事だと思うんだ。同じ教室でも先生が授業している時と休み時間に友達どうしでおしゃべりしている時とは違うのだから、オンとオフは切り替えなきゃ。

メモ欄

問６　この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i)　この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［10］。

①　［2］段落の最初の文と第２文は「としよう」で終わっているが、どちらの文も仮定の状況を提示することで、読者にその状況を具体的に想像させる働きがある。

②　［4］段落の最後の文の「ここで言う」は、直後の語句が他の分野で使われている意味ではなく、筆者が独自に規定した意味で用いていることに注意をうながす働きがある。

③　［6］段落の最初の文の「といったときには」は、直前の表現は本来好ましくないが、あえて使用しているという筆者の態度を示す働きがある。

④　［8］段落の第３文の「あるとされ」は、筆者から患者に対する敬意を示すことで、患者に対しても配慮のある丁寧な文章にする働きがある。

メモ欄

(ii)　この文章の構成に関する説明として**適当でないもの**を次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

① 2 段落では、レジリエンスについて他者の言葉で読者にイメージをつかませ、3 段落では、筆者の言葉で意味を明確にしてこの概念を導入している。

② 5 段落と 6 段落では、3 段落までに導入したレジリエンスという概念と、類似する他の概念との違いを詳しく説明し、レジリエンスについての説明を補足している。

③ 4 段落、7 段落、11 段落では、時系列順にそれぞれの時代でどのようにレジリエンスという概念が拡大してきたかを紹介している。

④ 13 段落では、これまでの議論を踏まえ、レジリエンスという概念について一般的な理解を取り上げた後、筆者の立場から反論している。

「大学入試センター試験」２０２０年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2020年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第1問（50）	1	1	4	2
		2	1	2
		3	1	2
		4	4	2
		5	4	2
	2	6	1	8
	3	7	2	8
	4	8	2	8
	5	9	1	8
	6	10	1	4
		11	4	4

第3講　小説対策　その1

第2問

次の文章は、蜂飼耳（はちかいみみ）「繭の遊戯」（二〇〇五年発表）の一節である。周囲の大人たちから「厄介者」扱いされている「おじさん」は、小屋に籠もって何かを作っていることが多かった。その小屋に幼いころの「わたし」はよく遊びに行っていた。これを読んで、後の問い（**問1～7**）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　45）

壁に、ギターが掛けられていた。触りたい。「あれ取って」。すぐには取ってもらえない。「あれ、取ってよ。ちょっとだけ」。おじさんは、取るかどうかわざと迷うふりをしながら、金具を外しギターを下ろす。受け取り、抱えてみる。鳴らしてみる。どんなメロディーにもなりはしない。つまらないというより、不安だった。自分でばら撒（ま）いたおかしな音に、自分で不安になるのだった。「返す」「もう、いいの」。

なにか弾いてよ。頼むと弾いてくれる。いつも同じ曲だ。最後まで全部、聞いたことはない。いつも途中で、「あれ」と首を傾（かし）げる。「あれ、あれ」。凧（たこ）が落下するときのように、見えない糸が不意に弛（ゆる）みはじめて、ぷつんと止まる。「あれ、わからなくなった」。いつものことだが、いつも、がっかりする。Iがっかり、という気もちには、かわいそうだ、と思う気もちが混ざっていた。生意気にも。五つや六つの子どもでも、そうしてこっそり、大人を哀れむときがあるのだ。

メモ欄

気まずくなり、いつも同じ質問をする。「なんていう曲」。つづきがわからないということは、どちらにもわかっていて、暗黙の了解なのに、おじさんは目を泳がせて、A音を探すふりをする。心をこめるように爪弾く。「アルハンブラ(注1)の思い出だよ」。アルハンブラってなに、とは聞けなかった。思い出というからには、人の名前だろう。きっと女の人の名前だ。そう思いこみ、恥ずかしさに密封されて、聞けないのだった。

　おじさんが厄介者にされているのは、仕事をしてお金を稼ぐということをしないからだった。とはいえ、働かなくても済むような資産があるわけではない。ときどき、トラックの運転手などをして、そのときに必要な分だけ稼ぐのだった。いまでいうところのフリーターだ。快く思わない人は親戚中にいて、誰彼と顔を合わせるたび、叱られているようだった。ちゃんと仕事しなさい。もっとも口うるさいのは、おじさんの姉、つまり、わたしの母だった。説教がはじまれば、早く終わらないかな、とうんざりして、柱の陰から見ていた。大人に怒られる大人は、子どものようなものだった。おじさんは大人なのに、と悔しかった。

　いったい、なにをしているのだろう、おじさんは。不思議だった。というのは、いつでも、忙しそうにしているからだ。自分で建てた小屋という繭に籠（こも）り、でも、眠ってはいない。じっとしてはいない。いつも、くるくると動きまわっている。器械をいじったり、なにか組み立てたり、切ったり、削ったりと。不思議だった。「なにしてるの」と聞けば必ず、「仕事」という答えが返ってくる。いつもなにかを作っているようだったが、その成果が見えるかたちで現れることは滅多（めった）にないのだった。

「いつまでも親のスネかじって」。ある日、おじさんの姉、つまり、わたしの母が大声を

メモ欄

上げて怒りはじめた。おじさんは耳が聞こえなくなった鳥のように、なにもかも無視して、母屋(注2)からすっと抜けて行った。「お母さん、なんとかいってよ」「いってるよ、いつも」「お母さんが甘いからよ」「もうわかった、あたしが死ねばいいんでしょ、じゃあ、死ぬよ」。祖母は罵りながら、豆の殻を剝いた。豆の匂いは喧嘩の匂い。いやになり、庭へ出て、小屋へと歩く。夜風がある。南天(注3)の繁みがあたまを振る。重たくざわつく。闇のなかに四角く切り取られたおじさんの窓。叩く。聞こえないのかな。重たくざわつく南天の繁み。もう少し強く叩く。

「あたしだよ」。ほそく開いた。閉じこめられた虎のように、外のようすを窺う。「おばあちゃんたち、喧嘩してるよ」。おじさんのせいだよ、とは口にしない。おじさんは、わたしがなにか企んでいないかどうか、じいっと目をほそめて観察する。わたしはその瞬間的な観察に耐える。なにもないとわかると、上げてくれた。小屋のなかは、いつもインドの匂いがした。アルハンブラがわからないと同様、インドもよくわからなかった。インドで買ってきたんだ、と見せてくれたお香の包みの上で、目ばかり大きな赤い顔、青い顔が見つめ合っている。「手がいっぱいあって怖い」「神さまだよ」「これが」「インドの」。

　仏壇に立てられるものより、ずっと長くて甘やかな香りのお香をもくもくと焚き、おじさんは緑色の瓶の液体を飲んでいた。「それなに」「シードル(注4)」「飲みたいな」「子どもの飲み物じゃないよ」「ちょっとだけ」。シードルを固まりのように飲みこんで、おじさんはため息をつく。シードルを舐めて、わたしもため息をついた。おじさんに隠して。擦り切れたカーペットの上に、さまざまな色のガラスの欠片。赤、青、黄、緑、ピンク、紫、だいだい、縞模様。そばには、作りかけのランプの笠のようなもの。

メモ欄

「そうだ、これ、どう思う」。ベッドの隅に腰掛けていたおじさんが、力なく立ち上がる。緊張する。意見を求められることなど、はじめてだったからだ。汚れた壁と黒い本棚の隙間から引き出されたのはステンドグラスの絵だった。ガラスはすべて嵌(は)めこまれ、完成品のようだった。鳥が二羽、空を渡っていくところ。「どう思う。わかるかな、鶴だけど」。

　五つや六つの子どもの目にも、その鶴にはなにか足りないと、わかった。鶴というより、もっとずんぐりした鳥に見える。翼をもう少しほそく長くしたら、いいのではないか。子どもの目にも、そんな意見が浮かぶほど、なにかが欠けていた。いま思うと、つまり、切れがなかったのだ。「悪くないよね」と、おじさん。いい、といってほしいのか。それとも、子どもは思った通りを口にすると期待して、本当の意見を待っているのか、わからない。そこのところがわからなかった。「悪くないでしょ」。Bそのとき、わたしのなかでむくむくと目を覚ましたのは、母に似たものだった。

「あひるみたい」。おじさんの顔が内側から崩れる。「鶴ってもっと、スマートだよ」。崩れる。思いがけないほど、あっさりと。それを見ると、取り返しのつかないことをした、という気もちになった。同時に満足だった。いいと思わないものを、いいとはいえない。いってはいけない。これで嫌われるのなら、それはそれでしかたないと、にわかに強気になり、息を吐いた。満足と孤独。しのびこんだ蛾(が)が、押せない窓を押して暴れ、しきりに乾いた音を立てる。そのとき、わたしはなにかを、教えられていたのだ。でも、そういう考えをひろげることはできず、なにか大事なものを自分で探り当てたつもりになり、昂揚(こうよう)していた。おじさんの手にこびりつく、石鹸(せっけん)では落とせない塗料。眠くなったふりをして、小屋を出た。

メモ欄

それからしばらくして、今度は陶芸の虫が、おじさんに取り憑いた。どこから土を運んで来るのか、周りが気づいたときにはもう、小屋の入口に敷いた古いビニールシートの上に、大小の器がいくつもならんでいた。「絵は、ないの」「絵は、乾かしてからだよ」。そういうことのすべて、本や雑誌を見て、やり方を覚えるのだという。「あんなに器用なんだったら、少しは活かせばいいようなものだけど」。母がいないとき祖母はそんなふうに呟いた。でも、母がいて、母に責められるときには、決してそうはいわない。「だって、あたしが産んだんだから、どうしようもない」という。「焼き物をやるっていっても、なにも習わないで、そんな我流でやっているだけじゃどうしようもない、仕事になんかならない」と、母。

五つや六つの子どもにとって、大人は二種類に分かれる。遊んでくれる人と、そうでない人。おじさんは遊んでくれるばかりか、いつもなにかを熱心に作っていた。他の大人たちが心配してため息をつくほど無力だとは、思えないのだった。小屋の陰にしゃがんで蟻の巣を見ていると、壁を通して、削ったり切ったりする音が漏れ出てくる。おじさんは確かに、なにかしている。それだけは、わかった。

「ちょっと、ちょっと」。池のそばに座りこみ、ゲンゴロウ(注5)を探していたら、おじさんに呼ばれた。小屋の窓が開き、意に反して閉じこめられた虎のように、手招きする。ゲンゴロウは見つからない。金魚が上がってきて静かな水面へ口をつけ、波紋をひろげる。「いま行く」。見せたいものがあるか、用をいいつけるか、どちらかだ。

小屋を覗いて、おどろいた。奇妙なかたちの白いものが、整列している。どれにも穴が

メモ欄

ずらりと開いていて、笛かな、と思う。「オカリナ(注6)だよ」。乾かしているのだった。「こんなにたくさん作ったの」というと、「売るんだ」。秘密の計画を打ち明けて、声をひそめた。「だけど、ちゃんと鳴るの」「鳴るよ、もちろん」。信用しないでいると、おじさんは「試作品」といって、箱のなかから、完成した水色のオカリナを取り出した。両手で持って、口をつける。迷子の梟(ふくろう)のような音。塗られた水色の濃淡は、模様のようにも、ただの斑(むら)のようにも見える。きれいかどうかわからない布で吹き口を拭い、わたしに渡した。

吹く。鳴ることは鳴る。でも、ばらばらの音。「これ見ればわかるよ」といって、おじさんはこまかく折った紙切れを出した。運指法(注7)が載っていたが、見てもよくわからなかった。ただ鳴らしているだけでも、三つ四つの音階に、たどり着くことはできる。欲しくなった。「ちょうだい」と頼むと、その願いを聞き入れるかどうか深く悩む、というふりをしながら、「じゃあ、あげよう」。それから、取り出される別の木箱。古びた木箱色のついたオカリナが、いくつも息を殺して夜明けの玉子のようにじっとしていた。「いっぱいあるから」。勝ち誇ったようにわらう。

Ⅱすごい、と思いながら、がっかりした。こんなふうに自分の手でオカリナを作ることができても、オカリナを作れない他の大人たちから、怒られつづけ、文句をいわれつづけるのか、と。拾った枝で池の水を掻(か)きまわしながら、あたまを悩ませた。他の人たちから見れば意味が薄いことを、自分の熱意だけでつづける。どこへ繋(つな)がっていくのか、わかりもしないまま。C触角の取れた虫。方向感覚を破壊された鳥。それは、どういうことなのだろう、と。おじさんの心配をしながら、自分も晴れない霧につつまれた。オカリナどころか、なにも作れない自分は、どうすればいいんだろう、と。

メモ欄

だれもいないところへ行って、オカリナを吹く。D曲にはならない。ただ、ばらばらの音。吹いていると、身体の表面が分厚く剝がれ落ちる気がする。それを拾い集めるべきかどうか、わからない。捨てておいていい、殻のようなものかもしれない。おじさんは、たくさんのオカリナを、バザーで売るというのだった。運指法の説明もつけて、とそれがすごいアイデアであるかのように、いうのだった。

（注）
1　アルハンブラの思い出――ギターの曲名。アルハンブラはスペインにある宮殿の名前。
2　母屋――住居のなかで、生活の主な場となっている建物。
3　南天――小さな赤い実をつける低木。
4　シードル――リンゴの果汁を発酵させた発泡酒。
5　ゲンゴロウ――池や沼にすむ昆虫。
6　オカリナ――鳥の形を模した土製の笛。
7　運指法――楽器を演奏するときの指の運び方。

メモ欄

問1　傍線部Ａ「音を探すふりをする。心をこめるように爪弾く。」とあるが、ここで「わたし」が捉えているおじさんの様子はどのようなものか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

① 自分が途中までしか弾けないことを取り繕うために、弦を鳴らし、身を入れて曲の続きを思い出そうとしているかのように見せている。

② 弾き切ることこそできないが大切な曲であることを「わたし」に伝えるために、記憶をたどって、一音一音探るかのように見せている。

③ 曲が弾けなくて気落ちしていることを「わたし」に悟らせないために、曲を想起しつつ、追憶にひたっているかのように見せている。

④ 曲を弾き通せなくて体面を失った落胆を隠すために、あらためて丁寧に曲を弾こうとし、深い思い入れがあるかのように見せている。

メモ欄

問２　傍線部Ｂ「そのとき、わたしのなかでむくむくと目を覚ましたのは、母に似たものだった。」とあるが、このときの「わたし」に起こった心の動きの説明として最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 12 。

① 自分の作品に不足している点がないかを気にしているおじさんが情けなくなり、あえて厳しい意見を述べておじさんに反省を迫りたいと思った。

② 作品の出来の良さを疑わず高い評価を期待するおじさんに違和感が芽ばえ、よい作品ではないという意見を相手を傷つけてでも伝えたいと思った。

③ 自分の作品に自信がない様子であるおじさんにいらだちを覚え、作品の出来ばえに対する失望感からも自分が気づいた欠点を告げようと思った。

④ 作品の完成度が高くないにもかかわらずよい評価を求めるおじさんに現実を突きつけたい気持ちが生じ、感じたことを率直に伝えようと思った。

メモ欄

問３　本文31行目から38行目と72行目から80行目の二箇所には、おじさんの生き方に対する母と祖母との姿勢の違いが表れている。その違いの説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［13］。

① おじさんのしていることについて、母は生計を立てるために独学でなくきちんと技術として習得すべきと主張しているのに対し、祖母はいつかは実力を見せるだろうと期待している。

② おじさんのしていることについて、母は家族の負担になっているのだからやめるべきだと主張しているのに対し、祖母はそれほど大きな負担ではないからかまわないと認めている。

③ おじさんのしていることについて、母はその価値を認めずに仕事をして収入を得るべきだと主張しているのに対し、祖母は素質が仕事につながっていないともったいなく思っている。

④ おじさんのしていることについて、母は祖母がもっと厳しく叱るべきだと主張しているのに対し、祖母はもうどうしようもないのでこれ以上は叱ってもしかたがないと諦めている。

メモ欄

問4　波線部Ⅰ「がっかり、という気もちには、かわいそうだ、と思う気もちが混ざっていた。」、波線部Ⅱ「すごい、と思いながら、がっかりした。」とあるが、この二つの「がっかり」にはどのような違いがあるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 14 。

① 波線部Ⅰでは、取り組んでいることを達成できず子どもの期待を裏切るおじさんに同情していたが、波線部Ⅱでは、おじさんが独学で創作する能力を持っているにもかかわらず、優れた作品を生み出して人を感動させられないために家族から怒られてばかりいることをやるせなく思うようになった。

② 波線部Ⅰでは、取り組んでいることをやり通せないおじさんの意志の弱さを情けなく思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんがいろいろなものを作り出す能力があるにもかかわらず、何かに絞ってそれを完成させようとはしないために大人には受け入れてもらえないことを悔しく思うようになった。

③ 波線部Ⅰでは、取り組んでいることが向上しなくてもよいと思っているおじさんを不憫（ふびん）に思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんが人を感心させるものを作る資質を持っているにもかかわらず、それを母や祖母に理解させようとしないために家族から罵られ報われないことを無念に思うようになった。

④ 波線部Ⅰでは、取り組んでいることが中途半端で終わってしまうおじさんを気の毒に思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんが自分自身の手でものを作り上げることができるにもかかわらず、いまだ自活してはいないために大人からは叱責

メモ欄

され価値を認められずにいることを残念に思うようになった。

問5　本文の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 「繭に籠り」（26行目）、「耳が聞こえなくなった鳥のように」（32行目）、「閉じこめられた虎のように」（39行目）は、いずれもおじさんが不本意な状況におかれていることを比喩で表している。

② 「叩く。聞こえないのかな。重たくざわつく南天の繁み。もう少し強く叩く。」（37〜38行目）は、「わたし」がおじさんの小屋を訪れた体験をその時点に立って臨場感をもって表している。

③ 「そのとき、わたしはなにかを、教えられていたのだ。」（68行目）は、語り手「わたし」が幼少期の体験を振り返り、現在の視点からの解釈も加えて語っていることを表している。

④ 「オカリナが、いくつも息を殺して夜明けの玉子のようにじっとしていた」（103行目）は、オカリナを玉子になぞらえるとともに擬人法を用いて、おじさんの作品を印象的に表している。

メモ欄

問6　傍線部Ｃ「触角の取れた虫。方向感覚を破壊された鳥。それは、どういうことなのだろう、と。おじさんの心配をしながら、自分も晴れない霧につつまれた。」とあるが、このときの「わたし」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① 行き先が見えないままで進んでいくおじさんの生き方について問うなかで、おじさんの現状を、ひとごとではなく自分自身の生き方にも関わるものとして受け止めてとまどっている。

② 知覚の一部を失った生き物におじさんのあり方を重ねるなかで、おじさんの苦労に寄り添うことも支えになることもできない自分が、おじさんのためにできることはないか悩んでいる。

③ 衝動に突き動かされて迷走しているおじさんの姿を見るなかで、おじさんがどこに向かっていくかわからず、それに振り回され続けることになる自分たちのことも不安に思っている。

④ 本当にやりたいことが見つからずにもがくおじさんの苦しさについて考えるなかで、いつも周囲の大人に否定され文句を言われ続けるおじさんの内心を測りかね、途方に暮れている。

メモ欄

問７　傍線部Ｄ「曲にはならない。ただ、ばらばらの音。吹いていると、身体の表面が分厚く剝がれ落ちる気がする。それを拾い集めるべきかどうか、わからない。捨てておいていい、殻のようなものかもしれない。」とあるが、「わたし」は結末部分でどのような心境になったと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 冒頭の「わたし」は、自らがギターを弾けないことに気づくとおじさんに代わりに弾くように頼んでいた。それに対して結末部分の「わたし」は、おじさんから離れて誰もいないところでオカリナを吹いており、自分を保護してくれる存在がいることの安心感を恐る恐るではあるものの手放そうとしつつある。

② 冒頭の「わたし」は、ギターを弾いたり作品を見せてくれたりして一緒に遊んでくれるおじさんの小屋のなかで充足感を得ていた。それに対して結末部分の「わたし」は、オカリナを小屋の外で吹いているように居心地のよい場所からあえて抜け出したことで、自分の道を進んでいくことの不安を実感しつつある。

③ 冒頭の「わたし」は、思うようにギターが弾けないおじさんを見て哀れむなど物事を醒めた目で見る傾向があった。それに対して結末部分の「わたし」は、ついにオカリナを作り上げたおじさんの熱心さに触れたことで、興味が持てるかどうかにこだわらずに挑戦する必要があるのではないかと迷いつつある。

④ 冒頭の「わたし」は、メロディーにならないギターの音のとりとめのなさに不安を感じてすぐに手放していた。それに対して結末部分の「わたし」は、オカリ

メモ欄

ナの音がばらばらであることに気づいてもなお吹き続けており、心もとなさを覚えながらも自身の価値観が揺らぎ始めていることを自覚しつつある。

「大学入学共通テスト」２０２５年度本試験より

メモ欄

■2025年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第2問（45）	1	11	1	6
	2	12	4	6
	3	13	3	6
	4	14	4	7
	5	15	1	7
	6	16	1	6
	7	17	4	7

第4講　小説対策　その2

第2問

次の文章は、原民喜「翳」（一九四八年発表）の一節である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　50）

私は一九四四年の秋に妻を喪ったが、ごく少数の知己へ送った死亡通知のほかに、満洲にいる魚芳へも端書を差出しておいた。妻を喪った私は悔み状が来るたびに、丁寧に読み返し仏壇のほとりに供えておいた。紋切型の悔み状であっても、それにはそれでまた喪にいるものの心を鎮めてくれるものがあった。本土空襲も漸く切迫しかかった頃のことで、出した死亡通知に何の返事も来ないものもあった。出した筈の通知にまだ返信が来ないという些細なことも、私にとっては時折気に掛るのであったが、妻の死を知って、ほんとうに悲しみを頒ってくれるだろうとおもえた川瀬成吉からもどうしたものか、何の返事もなかった。

私は妻の遺骨を郷里の墓地に納めると、再び棲みなれた千葉の借家に立帰り、そこで四十九日を迎えた。輸送船の船長をしていた妻の義兄が台湾沖で沈んだということをきいたのもその頃である。サイレンはもう頻々と鳴り唸っていた。A<u>そうした、暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と蹲ったまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かった。</u>その年も暮れようとする、底冷えの重苦しい、曇った朝、一通の封書が私のとこ

メモ欄

ろに舞込んだ。差出人は新潟県××郡××村×川瀬丈吉となっている。一目見て、魚芳の父親らしいことが分ったが、何気なく封を切ると、内味まで父親の筆跡で、息子の死を通知して来たものであった。私が満洲にいるとばかり思っていた川瀬成吉は、私の妻より五ヵ月前に既にこの世を去っていたのである。

　私がはじめて魚芳を見たのは十二年前のことで、私達が千葉の借家へ移った時のことである。私たちがそこへ越した、その日、彼は（注1）早速顔をのぞけ、それからは殆ど毎日註文を取りに立寄った。大概朝のうち註文を取ってまわり、夕方自転車で魚を配達するのであったが、どうかすると何かの都合で、日に二三度顔を現わすこともあった。そういう時も彼は気軽に（注2）一里あまりの路を自転車で何度も往復した。私の妻は毎日顔を逢わせているので、時々、彼のことを私に語るのであったが、まだ私は何の興味も関心も持たなかったし、殆ど碌に顔も知っていなかった。

　私がほんとうに魚芳の小僧を見たのは、それから一年後のことと云っていい。ある日、私達は隣家の細君と一緒にブラブラと千葉海岸の方へ散歩していた。すると、向の青々とした草原の径をゴムの長靴をひきずり、自転車を脇に押しやりながら、ぶらぶらやって来る青年があった。私達の姿を認めると、いかにも懐しげに帽子をとって、挨拶をした。

「魚芳さんはこの辺までやって来るの」と隣家の細君は訊ねた。

「ハア」と彼はこの一寸した（注3）逢遭を、いかにも愉しげにニコニコしているのであった。やがて、彼の姿が遠ざかって行くと、隣家の細君は、

「ほんとに、あの人は顔だけ見たら、まるで良家のお坊ちゃんのようですね」と嘆じた。

その頃から私はかすかに魚芳に興味を持つようになっていた。

メモ欄

その頃――と云っても隣家の細君が魚芳をほめた時から、もう一年は隔(へだ)っていたが、――私の家に宿なし犬が居ついて、表の露次(注4)でいつも寝そべっていた。褐色の毛並(けなみ)をした、その懶惰(らんだ)な雌犬は魚芳のゴム靴の音をきくと、のそのそと立上(たちあが)って、鼻さきを持上(もちあ)げながら自転車の後について歩く。何となく魚芳はその犬に対しても愛嬌(あいきょう)を示すような身振(みぶり)であった。彼がやって来ると、この露次は急に賑(にぎ)やかになり、細君や子供たちが一頻(ひとしき)り陽気に騒ぐのであったが、ふと、その騒ぎも少し鎮まった頃、窓の方から向を見ると、魚芳は木箱の中から魚の頭を取出(とりだ)して犬に与えているのであった。そこへ、もう一人雑魚売りの爺(じい)さんが天秤棒(てんびんぼう)を担いでやって来る。魚芳のおとなしい物腰に対して、この爺さんの方は威勢のいい商人であった。そうするとまた露次は賑やかになり、爺さんの忙しげな庖丁(ほうちょう)の音や、魚芳の滑らかな声が暫(しばら)くつづくのであった。――こうした、のんびりした情景はほとんど毎日繰返(くりかえ)されていたし、ずっと続いてゆくもののようにおもわれた。だが、日華事変(注5)の頃から少しずつ変(かわ)って行くのであった。

私の家は露次の方から三尺幅(注6)の空地を廻(まわ)ると、台所に行かれるようになっていたが、そして、台所の前にもやはり三尺幅の空地があったが、そこへ毎日、八百屋、魚芳をはじめ、いろんな御用聞(ごようきき)(注7)がやって来る。台所の障子一重を隔てた六畳が私の書斎になっていたので、御用聞と妻との話すことは手にとるように聞(きこ)える。私はぼんやりと彼等(かれら)の会話に耳をかたむけることがあった。ある日も、それは南風が吹き荒(すさ)んでものを考えるには明るすぎる、散漫な午後であったが、米屋の小僧と魚芳と妻との三人が台所で賑やかに談笑していた。そのうちに彼等の話題は教練(注8)のことに移って行った。二人とも青年訓練所へ通っているらしく、その台所前の狭い空地で、魚芳たちは「になえつつ」(注9)の姿勢を実演して(ア)興

メモ欄

じ合っているのであった。二人とも来年入営（注10）する筈であったので、兵隊の姿勢を身につけようとして陽気に騒ぎ合っているのだ。その恰好がおかしいので私の妻は笑いこけていた。だが、B何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった。台所へ姿を現していた御用聞のうちでは、八百屋がまず召集され、つづいて雑貨屋の小僧が、これは海軍志願兵になって行ってしまった。それから、豆腐屋の若衆がある日、赤襷（注11）をして、台所に立寄り忙しげに別れを告げて行った。

　目に見えない憂鬱の影はだんだん濃くなっていたようだ。が、魚芳は相変らず元気で小豆に立働いた。妻が私の着古しのシャツなどを与えると、大喜びで彼はそんなものも早速身に着けるのであった。朝は暗いうちから市場へ行き、夜は皆が寝静まる時まで板場で働く、そんな内幕も妻に語るようになった。料理の骨が憶えたくて堪らないので、教えを乞うと、親方は庖丁を使いながら彼の方を見やり、「黙って見ていろ」と、ただ、そう呟くのだそうだ。鞠躬如（注12）として勤勉に立働く魚芳は、もしかすると、そこの家の養子にされるのではあるまいか、と私の妻は臆測もした。ある時も魚芳は私の妻に、――あなたとそっくりの写真がありますよ。それが主人のかみさんの妹なのですが、と大発見をしたように告げるのであった。

　冬になると、魚芳は鵯を持って来て呉れた。彼の店の裏に畑があって、そこへ毎朝沢山小鳥が集まるので、釣針に蚯蚓を附けたものを木の枝に吊しておくと、小鳥は簡単に獲れる。餌は前の晩しつらえておくと、霜の朝、小鳥は木の枝に動かなくなっている――この手柄話を妻はひどく面白がったし、私も好きな小鳥が食べられるので喜んだ。すると、魚芳は殆ど毎日小鳥を獲ってはせっせと私のところへ持って来る。夕方になると台所に彼の

メモ欄

弾んだ声がきこえるのだった。――この頃が彼にとっては一番愉しかった時代かもしれない。その後戦地へ赴いた彼に妻が思い出を書いてやると、「帰って来たら又幾羽でも鵯鳥を獲って差上げます」と何かまだ弾む気持をつたえるような返事であった。

翌年春、魚芳は入営し、やがて満洲の方から便りを寄越すようになった。その年の秋から私の妻は発病し療養生活を送るようになったが、妻は枕頭で女中(注13)を指図して慰問の小包を作らせ魚芳に送ったりした。温かそうな毛の帽子を着た軍服姿の写真(注14)が満洲から送って来た。きっと魚芳はみんなに可愛がられているに違いない。炊事も出来るし、あの気性では誰からも(イ)重宝がられるだろう、と妻は時折噂をした。妻の病気は二年三年と長びいていたが、そのうちに、魚芳は北支(注15)から便りを寄越すようになった。もう程なく除隊(注16)になるから帰ったらよろしくお願いする、とあった。魚芳はまた帰って来て魚屋が出来ると思っているのかしら……と病妻は心細げに嘆息した。一しきり台所を賑わしていた御用聞きたちの和やかな声ももう聞かれなかったし、世の中はいよいよ兇悪な貌を露出している頃であった。千葉名産の蛤の缶詰を送ってやると、大喜びで、千葉へ帰って来る日をたのしみにしている礼状が来た。年の暮、新潟の方から梨の箱が届いた。差出人は川瀬成吉とあった。それから間もなく除隊になった挨拶状が届いた。魚芳が千葉へ訪れて来たのは、その翌年であった。

その頃女中を傭えなかったので、妻は寝たり起きたりの身体で台所をやっていたが、ある日、台所の裏口へ軍服姿の川瀬成吉がふらりと現れたのだった。彼はきちんと立ったまま、ニコニコしていた。C久振りではあるし、私も頻りに上ってゆっくりして行けとすすめたのだが、彼はかしこまったまま、台所のところの閾から一歩も内へ這入ろうとしない

メモ欄

のであった。「何になったの」と、軍隊のことはよく分らない私達が訊ねると、「兵長になりました」と嬉しげに応え、これからまだ魚芳へ行くのだからと、倉皇（注17）として立去ったのである。

　そして、それきり彼は訪ねて来なかった。あれほど千葉へ帰る日をたのしみにしていた彼はそれから間もなく満洲の方へ行ってしまった。だが、私は彼が千葉を立去る前に街の歯医者でちらとその姿を見たのであった。恰度私がそこで順番を待っていると、後から入って来た軍服の青年が歯医者に挨拶をした。「ほう、立派になったね」と老人の医者は懐しげに肯いた。やがて、私が治療室の方へ行きそこの椅子に腰を下すと、間もなく、後からやって来たその青年も助手の方の椅子に腰を下した。「これは仮りにこうしておきますから、また郷里の方でゆっくりお治しなさい」その青年の手当はすぐ終ったらしく、助手は「川瀬成吉さんでしたね」と、机のところのカードに彼の名を記入する様子であった。それまで何となく重苦しい気分に沈んでいた私はその名をきいて、はっとしたが、その時にはもう彼は階段を降りてゆくところだった。

　それから二三ヵ月して、新京（注18）の方から便りが来た。川瀬成吉は満洲の吏員（注19）に就職したらしかった。あれほど内地を恋しがっていた魚芳も、一度帰ってみて、すっかり失望してしまったのであろう。私の妻は日々に募ってゆく生活難を書いてやった。すると満洲から返事が来た。「大根一本が五十銭、内地の暮しは何のことやらわかりません。おそろしいことですね」——こんな一節があった。しかしこれが最後の消息であった。その後私の妻の病気は悪化し、もう手紙を認めることも出来なかったが、満洲の方からも音沙汰なかった。

メモ欄

その文面によれば、彼は死ぬ一週間前に郷里に辿(たど)りついているのである。「兼て彼(か)の地に於(おい)て病を得、五月一日帰郷、五月八日、永眠仕候(つかまつりそうろう)」と、その手紙は悲痛を押(おし)つぶすような調子ではあるが、それだけに、侘(わび)しいものの姿が、一そう大きく浮(うか)び上って来る。

あんな気性では皆から可愛がられるだろうと、よく妻は云っていたが、善良なだけに、彼は周囲から過重な仕事を押つけられ、悪い環境や機構の中を堪え忍んで行ったのではあるまいか。親方から庖丁の使い方は教えて貰えなくても、辛棒(しんぼう)した魚芳、久振りに訪ねて来ても、台所の閾から奥へは遠慮して這入ろうともしない魚芳。郷里から軍服を着て千葉を訪れ、(ウ)<u>晴れがましく</u>顧客の歯医者で手当してもらう青年。そして、遂に病軀(びょうく)をかかえ、とぼとぼと遠国から帰って来る男。……ぎりぎりのところまで堪えて、郷里に死にに還った男。私は何となしに、また魯迅(ろじん)(注20)の作品の暗い翳を思い浮べるのであった。

終戦後、私は郷里にただ死にに帰って行くらしい疲れはてた青年の姿を再三、汽車の中で見かけることがあった。……

（注）
1　彼は早速顔をのぞけ――「彼は早速顔をのぞかせ」の意。
2　一里――里は長さの単位。一里は約三・九キロメートル。
3　逢遭――出会い。
4　露次――ここでは、家と家との間の細い通路。「露地」「路地」なども表記される。
5　日華事変――日中戦争。当時の日本での呼称。
6　三尺――尺は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。

メモ欄

7　御用聞――得意先を回って注文を聞く人。
8　教練――軍事上の訓練。
9　になえつつ――銃を肩にかけること。また、その姿勢をさせるためにかけた号令でもあった。
10　入営――兵務につくため、軍の宿舎に入ること。
11　赤襷――ここでは、召集令状を受けて軍隊に行く人がかけた赤いたすき。
12　鞠躬如として――身をかがめてかしこまって。
13　女中――ここでは、一般家庭に雇われて家事をする女性。当時の呼称。
14　写真が満洲から送って来た。――「写真が満洲から送られて来た。」の意。
15　北支――中国北部。当時の日本での呼称。
16　除隊――現役兵が服務解除とともに予備役（必要に応じて召集される兵役）に編入されて帰郷すること。
17　倉皇として――急いで。
18　新京――現在の中国吉林省長春市。いわゆる「満洲国」の首都とされた。
19　吏員――役所の職員。
20　魯迅――中国の作家（一八八一―一九三六）。本文より前の部分で魯迅の作品に関する言及がある。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14 。

(ア)　興じ合っている　12
① 互いに面白がっている
② 負けまいと競っている
③ それぞれが興奮している
④ わけもなくふざけている

(イ)　重宝がられる　13
① 頼みやすく思われ使われる
② 親しみを込めて扱われる
③ 一目置かれて尊ばれる
④ 思いのままに利用される

(ウ)　晴れがましく　14
① 人目を気にしつつ
② 心の底から喜んで
③ 誇らしく堂々と
④ すがすがしい表情で

メモ欄

問２　傍線部Ａ「そうした、暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と蹲ったまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かった。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 生命の危機を感じさせる事態が続けざまに起こり恐怖にかられた「私」は、妻との思い出に逃避し安息を感じていた。

② 世の中の成り行きに閉塞感を覚えていた「私」は、妻と暮らした記憶によって生活への意欲を取り戻そうとしていた。

③ 戦局の悪化に伴って災いが次々に降りかかる状況を顧みず、「私」は亡き妻への思いにとらわれ続けていた。

④ 思うような連絡すら望めない状況にあっても、「私」は妻を思い出させるかつての交友関係にこだわり続けていた。

メモ欄

問３　傍線部Ｂ「何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった」とあるが、「私」がこのとき推測した妻の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［16］。

① 皆で明るく振る舞ってはいても、魚芳たちは「になえつつ」の練習をしているのであり、以前の平穏な日々が終わりつつあることを実感している。

② 「になえつつ」の練習をしあう様子に、魚芳たちがいだく期待を感じ取りつつも、商売人として一人前になれなかった境遇にあわれみを覚えている。

③ 魚芳たちは熱心に練習してはいるものの、「になえつつ」の姿勢すらうまくできていないため、軍務についたら苦労するのではと懸念している。

④ 魚芳たちは将来の不安を紛らそうとして、騒ぎながら「になえつつ」の練習をしているのだが、そのふざけ方がやや度を越していると感じている。

メモ欄

問４　傍線部Ｃ「彼はかしこまったまま、台所のところの閾から一歩も内へ這入ろうとしないのであった」とあるが、魚芳は「私達」に対してどのような態度で接しようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［17］。

① 戦時色が強まりつつある時期に、連絡せずに「私達」の家を訪問するのは兵長にふさわしくない行動だと気づき、改めて礼儀を重んじようとしている。

② 再び魚屋で仕事ができると思ってかつての勤め先に向かう途中に立ち寄ったので、台所から上がれという「私達」の勧めを丁重に断ろうとしている。

③ 「私達」と手紙で近況を報告しあっていたが、予想以上に病状が悪化している「妻」の姿を目の当たりにして驚き、これ以上迷惑をかけないようにしている。

④ 除隊後に軍服姿で「私達」を訪ね、姿勢を正して笑顔で対面しているが、かつて御用聞きと得意先であった間柄を今でもわきまえようとしている。

メモ欄

問5　本文中には「私」や「妻」あての手紙がいくつか登場する。それぞれの手紙を読むことをきっかけとして、「私」の感情はどのように動いていったか。その説明として最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

① 妻の死亡通知に対する悔み状（2行目）を読んで、紋切型の文面からごく少数の知己とでさえ妻の死の悲しみを共有しえないことを知った。その後、満洲にいる魚芳から返信が来ないという些細なことが気掛かりになる。やがて魚芳とも悲しみを分かち合えないのではないかと悲観的な気持ちが強まった。

② 川瀬丈吉からの封書（13行目、115行目）を読んで、川瀬成吉が帰郷の一週間後に死亡していたことを知った。生前の魚芳との交流や彼の人柄を思い浮かべ、彼の死にやりきれなさを覚えていく。終戦後、汽車でしばしば見かけた疲弊して帰郷する青年の姿に、短い人生を終えた魚芳が重なって見えた。

③ 満洲から届いた便り（77行目）を読んで、魚芳が入営したことを知った。妻が送った防寒用の毛の帽子をかぶる魚芳の写真が届き（79行目）、新たな環境になじんだ様子を知る。だが、すぐに赴任先が変わったので、周囲に溶け込めず立場が悪くなったのではないかと心配になった。

④ 新京から届いた便り（107行目）を読んで、川瀬成吉が満洲の吏員に就職したらしいことを知った。妻が内地での生活難を訴えると、それに対してまるで他人事のように語る返事が届いた。あれほど内地を恋しがっていたのに、役所に勤めた途端に内地への失望感を高めたことに不満を覚えた。

メモ欄

問６　この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①〜⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［19］・［20］。

①　２行目「魚芳」は川瀬成吉を指し、25行目の「魚芳」は魚屋の名前であることから、川瀬成吉が、彼の働いている店の名前で呼ばれている状況が推定できるように書かれている。

②　1行目「私は一九四四年の秋に妻を喪った」、18行目「私がはじめて魚芳を見たのは十二年前のことで」のように、要所で時を示し、いくつかの時点を行き来しつつ記述していることがわかるようにしている。

③　26行目「ブラブラと」、30行目「ニコニコ」、36行目「のそのそと」、124行目「とぼとぼと」と、擬態語を用いて、人物や動物の様子をユーモラスに描いている。

④　37〜40行目に記された宿なし犬との関わりや69〜76行目の鴨をめぐるエピソードを提示することで、魚芳の人柄を浮き彫りにしている。

⑤　50行目「南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる」という部分は、「午後」を修飾し、思索に適さない様子を印象的に描写している。

⑥　78行目「私の妻は発病し」、81行目「妻の病気は二年三年と長びいていたが」、84行目「病妻」というように、妻の状況を断片的に示し、「私」の生活が次第に厳しくなっていったことを表している。

「大学入試センター試験」２０２０年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2020年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第2問 (50)	1	12	1	3
		13	1	3
		14	3	3
	2	15	3	7
	3	16	1	8
	4	17	4	8
	5	18	2	8
	6	19－20	3－6	10 (各5)

（注）－（ハイフン）でつながれた正解は、順序を問わない。

〈 Memo 〉

第５講　実用文対策　その１

第３問

わかりやすい言葉づかいについて自分の考えを書くという課題を与えられたUさんは、かつて外来語をわかりやすく言い換える提案があったことを知って興味を持ち、そのことを例に**【文章】**をまとめている。**【資料Ⅰ】**と**【資料Ⅱ】**は、集めた資料をUさんがまとめ直したものである。これらを読んで、後の問い（**問１～３**）に答えよ。（配点　20）

【文章】（段落に 1 ～ 4 の番号を付してある。）

1 言いたいことをわかりやすく伝えるためには、語句を言い換えたほうがよいことがある。その一例として外来語を取り上げたい。**【資料Ⅰ】**は、二〇〇三年当時、あまり定着していなかった外来語について、わかりやすい言い換えが提案されたときの意識調査の結果である。（X）ここでは「インフォームドコンセント」という語に注目して、言い換えの意義について考える。

2 **【資料Ⅱ】**は、「インフォームドコンセント」の言い換えについての提案である。「納得診療」や「説明と同意」と言い換えると、「インフォームドコンセント」とは、医師の十分な説明をもとに患者が納得したり同意したりして、両者が医療に臨むことを表す語句だとわかる。診療場面で重要なことであるにもかかわらず、当時、その概念は浸透

メモ欄

していなかった。この言い換えの提案は、そうした状況のなかで、A意義があったと考えられる。

3 この提案から二〇年近くたった今、言い換えが必要ないほど定着した外来語もあるだろう。しかし、外来語をわかりやすく言い換える必要性が今後なくなるわけではない。それは、ある外来語がそのまま一般的になったとしても、社会の変化にあわせて別の新しい外来語が使われるようになるからだ。また、B時代が進んでも社会全体として外来語の増加を当然だと考える人が大きく増えるとは限らない。意味の伝わりにくそうな外来語については、これからも言い換えたほうがよい場合があるのではないか。

4 今回は外来語の言い換えを例に、わかりやすい言葉づかいの重要性について考えた。今後も外来語について関心を持っていきたい。

メモ欄

【資料Ⅰ】外来語に関する意識の調査

調査年：2003年　調査対象：満15歳以上の男女　調査有効数：3087人
図の数字は％。四捨五入のため合計が100％にならない場合がある。

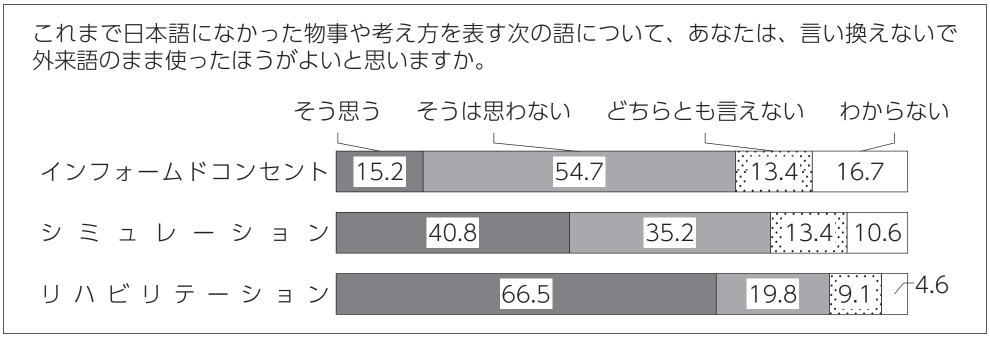


図１　外来語のまま使ったほうがよいか

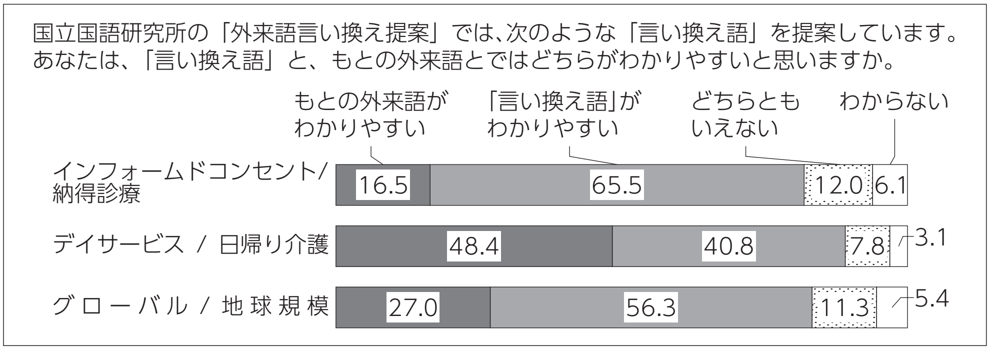


図２　「言い換え語」のわかりやすさ

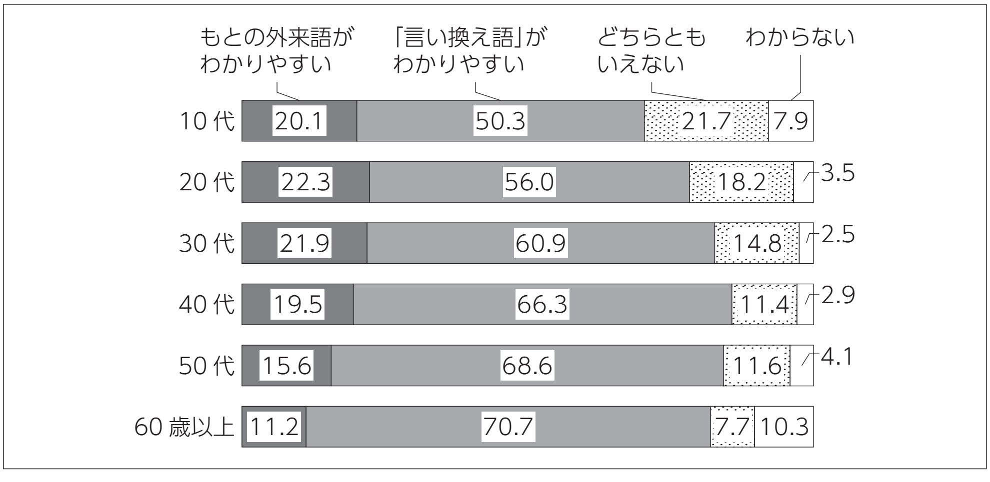


図３　図２の調査のうち「インフォームドコンセント」についての年代別回答

（国立国語研究所『外来語に関する意識調査（全国調査）』をもとに作成）

【資料Ⅱ】「インフォームドコンセント」の言い換え提案（2006年）

インフォームドコンセント

【言い換え語】　納得診療　説明と同意

【用例】

納　得　診　療

この病院は**インフォームドコンセント**を重視し、患者中心の医療の実践をうたっている。

説　明　と　同　意

子供の移植患者に対しての**インフォームドコンセント**は昨春から一度でよいとされている。

【意味説明】

十分な説明を受けた上での同意

【手引き】

◎1980年代から日本でも使われるようになった語で、1990年に日本医師会が、日本の医療への導入と普及の必要性を指摘したことなどをきっかけに、一般に広まり始めた。

◎医療を中心に、現代社会における重要概念として、普及定着が望まれているが、現状では意味を理解している人は少ないので、言い換えや説明付与などの必要性は高い。

◎診療場面において使われることが多く、患者の納得に基づく診療行為を表したい場合は、「納得診療」という言い換えが分かりやすい。また、患者の納得という行為を前面に出すことによって、患者の視点からこの概念を見ることを促す効果も期待でき、概念の普及にも役立つと考えられる。

（国立国語研究所「外来語」委員会編『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』をもとに作成）

問１　Uさんは、「インフォームドコンセント」という語に注目する理由を明確にするため、**【文章】**の［1］段落の（X）に文を書き加えることにした。書き加える文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［18］。

① **図１**が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、他の語に比べて多くの人が外来語のまま使用するほうがよいとしている。

② **図１**と**図２**が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、外来語の言い換えを肯定的に捉える人の割合が他の語より多い。

③ **図２**と**図３**が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、「言い換え語」に対する年代ごとの意識の差が他の語より大きい。

④ **図３**が示すとおり、特に「インフォームドコンセント」については、もとの外来語のほうがわかりやすいとする割合が、年代が下がるほど高い。

メモ欄

問２　Ｕさんは、**【文章】**の傍線部Ａ「意義があった」について、どのような意義があったのかを具体的に示すため、表現を修正することにした。修正する表現の内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 19 。

① 医療現場で医師の言葉が患者にわかりやすく伝わるようにするとともに、外来語を身近な日本語に言い換えるという発想を広めようとする点で意義のある試みだった

② 医師の責任を明確にして患者を安心させるとともに、医師の使う外来語を患者が適切に理解した場合の効果を社会に伝えようとする点で意義のある試みだった

③ 医師と患者の両方の立場を尊重するとともに、患者の訴えを医師が十分に理解して受け止めることの重要性を確認していこうとする点で意義のある試みだった

④ 医療における医師の説明や患者の納得の必要性を重視するとともに、この外来語の表している概念を社会に定着させようとする点で意義のある試みだった

メモ欄

問３　Uさんは、**【資料Ⅲ】**を用いて**【文章】**の 3 段落の主張に根拠を加え、さらに**【文章】**の全体を整えることにした。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料Ⅲ】外来語に関する意識の2002年と2022年の比較

調査対象：満20歳以上の男女

調査有効数：2002年は1295人、2022年は1152人

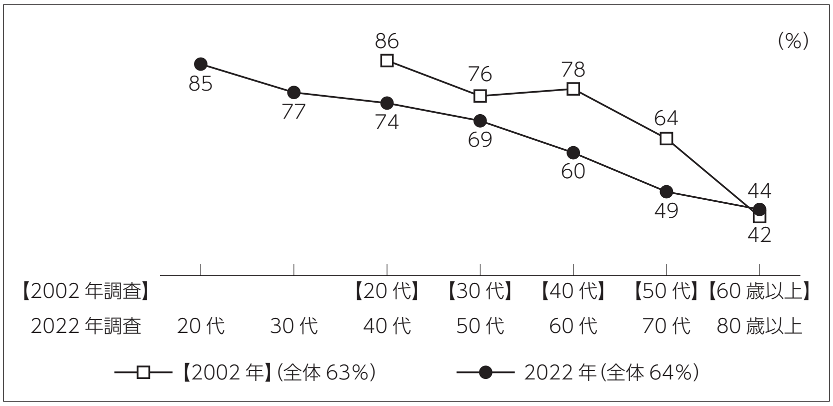


図４　「外来語が増えるのは当然だ」とする人の割合

【図についてのメモ】

・図では、次の二つの考え方のうちＡに賛成した人の割合を示している。

> Ａ：新しい物や考え方が入ってくるから、外来語が増えるのは当然だ
>
> Ｂ：新しい物や考え方が入ってきたら、外国語を日本語に訳して使うほうがよい

・図の横軸では生まれた年を基準にして同じ世代が同じ位置に示されている。例えば、【2002年調査】の【20代】と2022年調査の40代は、生まれた年を基準にすれば同じ世代なので、同じ位置に示されている。

・回答者全体のうちＡに賛成した人の割合は、2002年と2022年でそれぞれ63%、64%である。

（NHK放送文化研究所『放送研究と調査』2022年12月号をもとに作成）

(i)　Uさんは、**【文章】**の 3 段落の傍線部Ｂ「時代が進んでも社会全体として外来語の増加を当然だと考える人が大きく増えるとは限らない」という主張の根拠を明確にするため、**【資料Ⅲ】**を用いようと考えた。**【資料Ⅲ】**から読み取れる根拠として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 20 。

① 二〇〇二年と二〇二二年の六〇代以上を除く各年代について、同じ年代どうしを比較すると、外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合に大きな変化が見られないこと。

② 二〇〇二年と二〇二二年のどちらの調査においても、回答者全体のうち外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合は六割程度しかなく、著しい差はないということ。

③ 二〇〇二年の調査と比較すると、二〇二二年の調査では、生まれた年を基準にした同じ世代において、外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合が低い場合が多いこと。

④ 二〇〇二年の六〇歳以上と比較すると、二〇二二年の六〇代、七〇代、八〇歳以上の各年代では、外来語が増えるのは当然だと回答した人の割合が低くなっているということ。

メモ欄

(ii)　さらにUさんは【文章】全体を読み直し、加筆・修正したいと思ったことを書き留めた。加筆の方針として最も適当なものを次の①～③のうちから一つ、修正の方針として最も適当なものを次の④～⑥のうちから一つ、それぞれ選べ。加筆の方針についての解答番号は［21］、修正の方針についての解答番号は［22］。

① かつて言い換えを求められた外来語がその後どれだけ定着したかを示すため、【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】をもとに、言い換え語に対する人々の意識の変化について説明する文章を［1］段落に加筆する。

② 言い換えの提案がどのような形で実践されようとしていたかを示すため、【資料Ⅱ】をもとに、用例を挙げたり手引きを加えたりという工夫があったことを説明する文章を［2］段落に加筆する。

③ 外来語の言い換えが現在ではより一層重要になっていることを示すため、【資料Ⅲ】をもとに、外来語を頻繁に使う人が増加していく傾向にあるということを説明する文章を［3］段落に加筆する。

④ 与えられた課題に対しての結論を述べる必要があるので、［4］段落の末尾の文を「一つ一つの外来語の意味を適切に理解していくことが重要である。」と修正する。

⑤ 与えられた課題に対しての結論を述べる必要があるので、［4］段落の末尾の文を「伝える相手や目的に応じて語句を使い分けていくことが重要である。」と修正する。

⑥ 与えられた課題に対しての結論を述べる必要があるので、［4］段落の末尾の文

メモ欄

を「医師の使う用語の概念が患者に伝わるかに注目することが重要である。」と修正する。

「大学入試共通テスト」２０２５年度本試験より

メモ欄

第５講　実用文対策　その１　解答

■2025年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第3問（20）	1	18	2	4
	2	19	4	5
	3	20	4	5
		21	2	3
		22	5	3

〈 Memo 〉

第6講　実用文対策　その2

第A問

次の【資料Ⅰ】（文章、図、グラフ1～グラフ3）と【資料Ⅱ】は、気候変動が健康に与える影響について調べていたひかるさんが見つけた資料の一部である。これらを読んで、後の問い（問1～3）に答えよ。（配点　20）

メモ欄

【資料Ⅰ】

文章　健康分野における、気候変動の影響について

ⓐ気候変動による気温上昇は熱[注1]ストレスを増加させ、熱中症リスク[注2]や暑熱による死亡リスク、その他、呼吸器系疾患等の様々な疾患リスクを増加させる。特に、ⓑ暑熱に対して脆(ぜい)弱性が高い高齢者を中心に、暑熱による超過死亡[注3]が増加傾向にあることが報告されている。年によってばらつきはあるものの、熱中症による救急搬送人員・医療機関受診者数・熱中症死亡者数は増加傾向にある。

ⓒ気温の上昇は感染症[注4]を媒介する節足動物の分布域・個体群密度・活動時期を変化させる。感染者の移動も相まって、国内での感染連鎖が発生することが危惧される。これまで侵入・定着がされていない北海道南部でもヒトスジシマカの生息が拡大する可能性や、日本脳炎ウイルスを媒介する外来性の蚊の鹿児島県以北への分布域拡大の可能性などが新たに指摘されている。

外気温の変化は、水系[注5]・食品媒介性感染症やインフルエンザのような感染症類の流行パターンを変化させる。感染性胃腸炎やロタウイルス感染症、下痢症などの水系・食品媒介性感染症、インフルエンザや手足口病などの感染症類の発症リスク・流行パターンの変化が新たに報告されている。

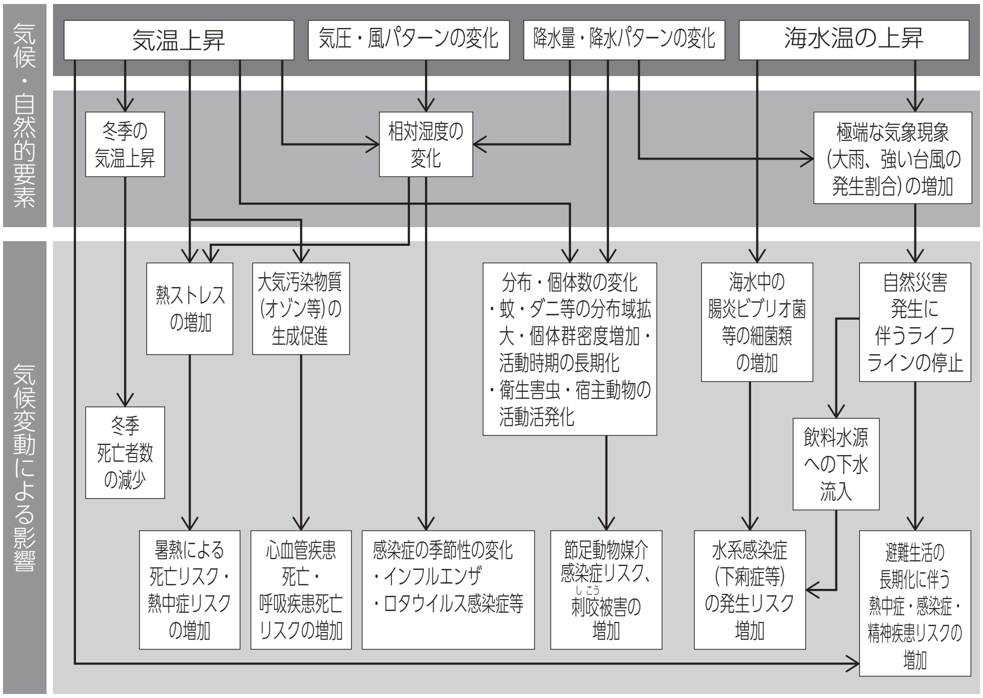
猛暑や強い台風、大雨等の極端な気象現象の増加に伴いⓓ自然災害が発生すれば、被災者の暑熱リスクや感染症リスク、精神疾患リスク等が増加する可能性がある。

2030年代までの短期的には、ⓔ温暖化に伴い光化学オキシダント・オゾン等の汚染物質の増加に伴う超過死亡者数が増加するが、それ以降は減少することが予測されている。

健康分野における、気候変動による健康面への影響の概略は、次の 図 に示すとおりである。

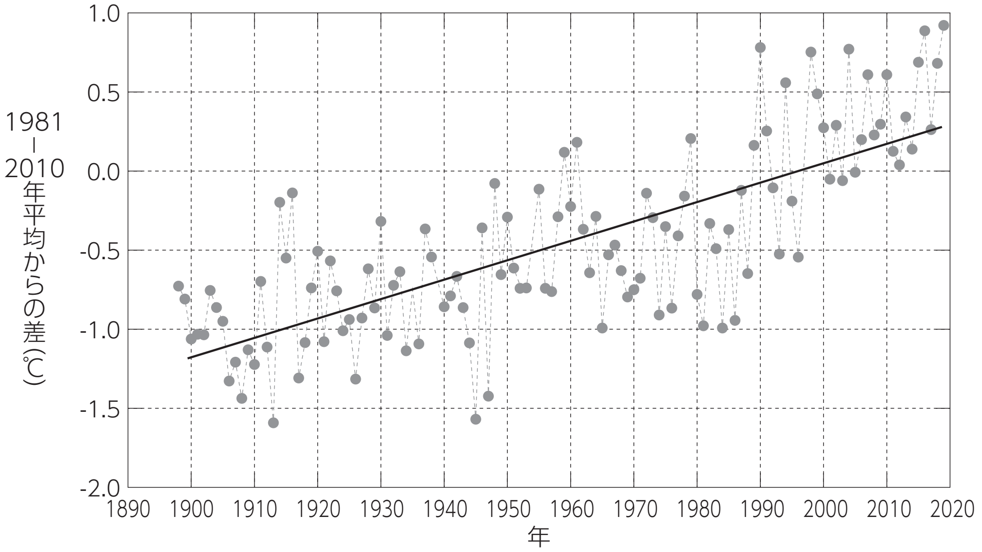
（注）1　熱ストレス……高温による健康影響の原因の総称。
　　　2　リスク……危険が生じる可能性や度合い。
　　　3　超過死亡……過去のデータから統計的に推定される死者数をどれだけ上回ったかを示す指標。
　　　4　感染症を媒介する節足動物……昆虫やダニ類など。
　　　5　水系・食品媒介性感染症……水、食品を介して発症する感染症。

図



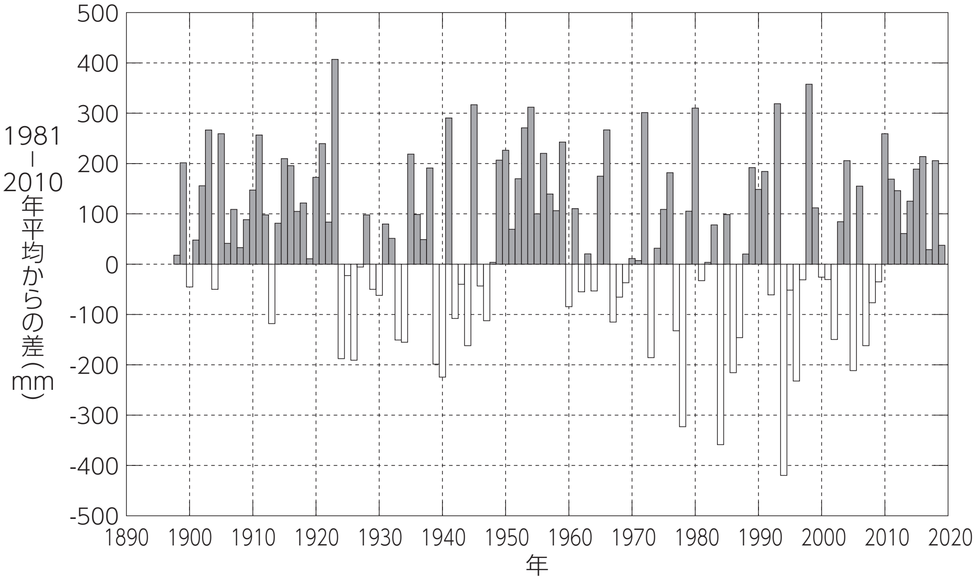
（ 文章 と 図 は、環境省「気候変動影響評価報告書 詳細（令和２年 12 月）」をもとに作成）

グラフ１　日本の年平均気温偏差の経年変化



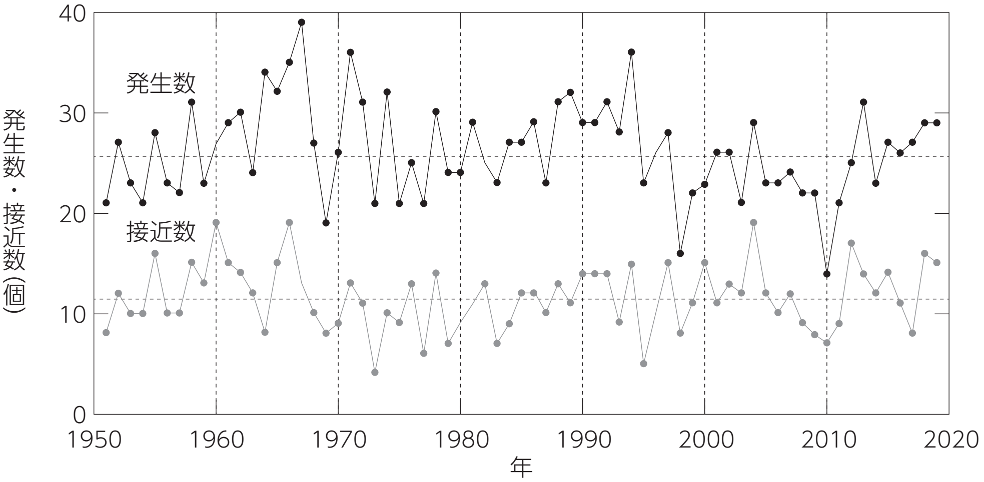
点線で結ばれた点は、国内15観測地点での年平均気温の基準値からの偏差を平均した値を示している。直線は長期変化傾向（この期間の平均的な変化傾向）を示している。基準値は1981～2010年の30年平均値。

グラフ２　日本の年降水量偏差の経年変化



棒グラフは気象庁の観測地点のうち、国内51地点での各年の年降水量の基準値からの偏差を平均した値を示している。0を基準値とし、上側の棒グラフは基準値と比べて多いことを、下側の棒グラフは基準値と比べて少ないことを示している。基準値は1981～2010年の30年間の平均値。

グラフ３　台風の発生数及び日本への接近数



点線は平年値（1950年～2020年の平均）を表す。

（グラフ１～グラフ３は、気象庁「気候変動監視レポート 2019（令和２年７月）」をもとに作成）

【資料Ⅱ】

　地球温暖化の対策は、これまで原因となる温室効果ガスの排出を削減する「緩和策」を中心に進められてきた。しかし、世界が早急に緩和策に取り組んだとしても、地球温暖化の進行を完全に制御することはできないと考えられている。温暖化の影響と考えられる事象が世界各地で起こる中、その影響を抑えるためには、私たちの生活・行動様式の変容や防災への投資といった被害を回避、軽減するための「適応策」が求められる。例えば、環境省は熱中症予防情報サイトを設けて、私たちが日々の生活や街中で熱中症を予防するための様々な工夫や取り組みを紹介したり、保健活動にかかわる人向けの保健指導マニュアル「熱中症環境保健マニュアル」を公開したりしている。これも暑熱に対する適応策である。また、健康影響が生じた場合、現状の保健医療体制で住民の医療ニーズに応え、健康水準を保持できるのか、そのために不足しているリソース[注1]があるとすれば何で、必要な施策は何かを特定することが望まれる。例えば、21世紀半ばに熱中症搬送者数が２倍以上となった場合、現行の救急搬送システム（救急隊員数、救急車の数等）ですべての熱中症患者を同じ水準で搬送可能なのか、受け入れる医療機関、病床、医療従事者は足りるのか、といった評価を行い、対策を立案していくことが今後求められる。また緩和策と健康増進を同時に進めるコベネフィット[注2]を追求していくことも推奨される。例えば、自動車の代わりに自転車を使うことは、自動車から排出される温室効果ガスと大気汚染物質を減らし（緩和策）、自転車を漕（こ）ぐことで心肺機能が高まり健康増進につながる。肉食を減らし、野菜食を中心にすることは、家畜の飼育過程で糞（ふん）尿などから大量に排出されるメタンガスなどの温室効果ガスを抑制すると同時に、健康増進につながる。こうしたコベネフィットを社会全体で追求していくことは、各セクター[注3]で縦割りになりがちな適応策に横のつながりをもたらすことが期待される。

（橋爪真弘（はしづめまさひろ）「公衆衛生分野における気候変動の影響と適応策」による）

（注）１　リソース……資源。
　　　２　コベネフィット……一つの活動が複数の利益につながること。
　　　３　セクター……部門、部署。

問１　**【資料Ⅰ】**　**文章** と **図** との関係について、次の(i)(ii)の問いに答えよ。

(i)　**文章** の下線部ⓐ〜ⓔの内容には、**図** では**省略されているものが二つ**ある。その二つの組合せとして最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は［ 1 ］。

① ⓑとⓔ
② ⓐとⓓ
③ ⓒとⓔ
④ ⓑとⓓ

(ii)　**図** の内容や表現の説明として**適当でないもの**を、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は［ 2 ］。

① 「気候変動による影響」として環境及び健康面への影響を整理して図示し、**文章** の内容を読み手が理解しやすいように工夫している。
② 気温上昇によって降水量・降水パターンの変化や海水温の上昇が起こるという因果関係を図示することによって、**文章** の内容を補足している。
③ 「気候・自然的要素」が及ぼす「気候変動による影響」を図示することにより、特定の現象が複数の影響を生み出し得ることを示唆している。
④ 気候変動によって健康分野が受ける複雑な影響を読み手にわかりやすく伝えるために、いくつかの事象に限定して因果関係を図示している。

メモ欄

問２　次のア～エの各文は、ひかるさんが**【資料Ⅰ】**、**【資料Ⅱ】**を根拠としてまとめたものである。**【凡例】**に基づいて各文の内容の正誤を判断したとき、その組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［３］。

【凡例】

正　し　い――述べられている内容は、正しい。
誤っている――述べられている内容は、誤っている。
判断できない――述べられている内容の正誤について、**【資料Ⅰ】**、**【資料Ⅱ】**からは判断できない。

ア　気候変動による気温の上昇は、冬における死亡者数の減少につながる一方で、高齢者を中心に熱中症や呼吸器疾患など様々な健康リスクをもたらす。
イ　日本の年降水量の平均は一九〇一年から一九三〇年の三〇年間より一九八一年から二〇一〇年の三〇年間の方が多く、気候変動の一端がうかがえる。
ウ　台風の発生数が平年値よりも多い年は日本で真夏日・猛暑日となる日が多く、気温や海水温の上昇と台風の発生数は関連している可能性がある。
エ　地球温暖化に対して、温室効果ガスの排出削減を目指す緩和策だけでなく、被害を回避、軽減するための適応策や健康増進のための対策も必要である。

メモ欄

① ア　正しい　イ　誤っている　ウ　誤っている　エ　判断できない

② ア　誤っている　イ　判断できない　ウ　誤っている　エ　誤っている

③ ア　正しい　イ　誤っている　ウ　判断できない　エ　正しい

④ ア　誤っている　イ　正しい　ウ　判断できない　エ　正しい

メモ欄

問３　気候変動が健康に影響を与えることを知り、高校生として何ができるか考えたひかるさんは、**【資料Ⅰ】**と**【資料Ⅱ】**を踏まえたレポートを書くことにした。次の**【目次】**は、ひかるさんがレポートの内容と構成を考えるために作成したものである。これを読んで、後の(i)(ii)の問いに答えよ。

【目次】

テーマ：気候変動が健康に与える影響と対策

はじめに：テーマ設定の理由

第１章　気候変動が私たちの健康に与える影響

- a　暑熱による死亡リスクや様々な疾患リスクの増加
- b　感染症の発生リスクの増加
- c　自然災害の発生による被災者の健康リスクの増加

第２章　データによる気候変動の実態

- a　日本の年平均気温の経年変化
- b　日本の年降水量の経年変化
- c　台風の発生数及び日本への接近数

第３章　気候変動に対して健康のために取り組むべきこと

- a　生活や行動様式を変えること
- b　防災に対して投資すること
- c　［　X　］
- d　コベネフィットを追求すること

おわりに：調査をふりかえって

参考文献

メモ欄

(ⅰ)【資料Ⅱ】を踏まえて、レポートの第３章の構成を考えたとき、【目次】の空欄 X に入る内容として最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 4 。

① 熱中症予防情報サイトを設けて周知に努めること
② 保健活動にかかわる人向けのマニュアルを公開すること
③ 住民の医療ニーズに応えるために必要な施策を特定すること
④ 現行の救急搬送システムの改善点を明らかにすること

メモ欄

(ii) ひかるさんは、級友に**【目次】**と**【資料Ⅰ】【資料Ⅱ】**を示してレポートの内容や構成を説明し、助言をもらった。**助言の内容に誤りがあるもの**を、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は［５］。

① Ａさん　テーマに掲げている「対策」という表現は、「健康を守るための対策」なのか、「気候変動を防ぐための対策」なのかわかりにくいから、そこが明確になるように表現すべきだと思うよ。

② Ｂさん　第１章のｂの表現は、ａやｃの表現とそろえたほうがいいんじゃないかな。「大気汚染物質による感染症の発生リスクの増加」とすれば、発生の原因まで明確に示すことができると思うよ。

③ Ｃさん　気候変動と健康というテーマで論じるなら、気候変動に関するデータだけでなく、感染症や熱中症の発生状況の推移がわかるデータも提示できると、より根拠が明確になるんじゃないかな。

④ Ｄさん　第１章で、気候変動が健康に与えるリスクについて述べるんだよね。でも、その前提として気候変動が起きているデータを示すべきだから、第１章と第２章は入れ替えた方が、流れがよくなると思うよ。

「大学入学共通テスト」２０２５年度試作問題より

メモ欄

第B問

ヒロミさんは、日本語の独特な言葉遣いについて調べ、「言葉遣いへの自覚」という題で自分の考えを**【レポート】**にまとめた。**【資料Ⅰ】**〜**【資料Ⅲ】**は、**【レポート】**に引用するためにアンケート結果や参考文献の一部を、見出しを付けて整理したものである。これらを読んで、後の問い（**問１〜４**）に答えよ。（配点　20）

【レポート】

男女間の言葉遣いの違いは、どこにあるのだろうか。**【資料Ⅰ】**によると、男女の言葉遣いは同じでないと思っている人の割合は、七割以上いる。実際、「このバスに乗ればいいのよね？」は女の子の話し方として、「このカレーライスうまいね！」は男の子の話し方として認識されている。これは、性差によって言葉遣いがはっきり分かれているという、日本語の特徴の反映ではないだろうか。

一方、［　X　］にも着目すると、男女の言葉遣いの違いを認識しているものの、女性らしいとされていた言葉遣いがあまり用いられず、逆に男性らしいとされる言葉遣いをしている女性も少なからず存在することが分かる。

ここで、**【資料Ⅱ】【資料Ⅲ】**の「役割語」を参照したい。これらの資料によれば、言葉遣いの違いは性別によるとはかぎらない、そして、［　Y　］ということである。

たしかに、マンガやアニメ、小説などのフィクションにおいて、このような役割語は、非常に発達している。役割語がなければ、「キャラクタ」を描けないようにすら感じる。とくに、文字は映像と違って、顔は見えないし声も聞こえない。役割語が効率的

メモ欄

にキャラクタを描き分けることによって、それぞれのイメージを読者に伝えることができる。その一方で、キャラクタのイメージがワンパターンに陥ってしまうこともある。

それでは、現実の世界ではどうだろうか。私たちの身近にある例を次にいくつか挙げてみよう。

［　Z　］

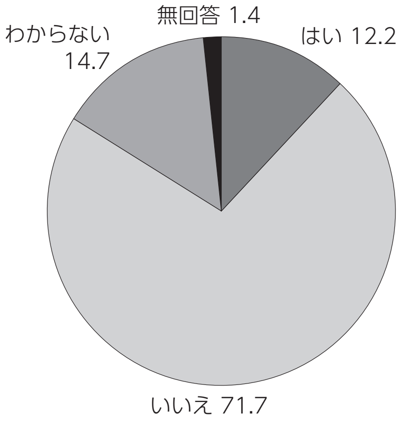
以上のように、私たちの周りには多くの役割語があふれている。したがって、役割語の性質を理解したうえで、フィクションとして楽しんだり、時と場所によって用いるかどうかを判断したりするなど、自らの言葉遣いについても自覚的でありたい。

メモ欄

【資料Ⅰ】　性別による言葉遣いの違い

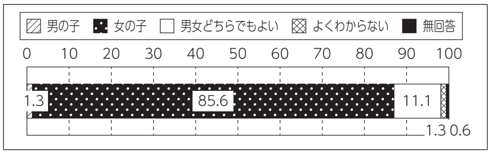
調査期間　2008/11/23～2008/12/08
調査対象　小学生～高校生10,930人（男子5,787人、女子5,107人、無回答36人）
調査方法　任意で回答
単位　　　全て％

質問１
男の子（人）が使うことばと、女の子（人）が使うことばは、同じだと思いますか？

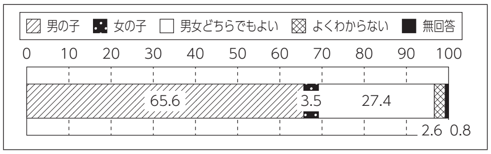


質問２
①次の各文は、男の子、女の子、どちらの話し方だと思いますか？

「このバスに乗ればいいのよね？」

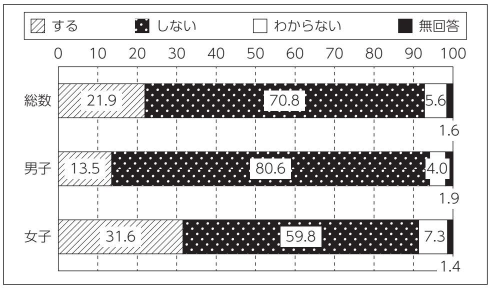


「このカレーライスうまいね！」

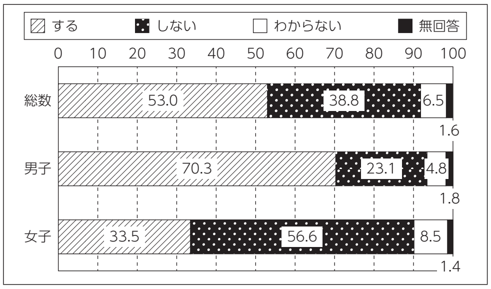


②次のようなことばづかいはしますか？

「このバスに乗ればいいのよね？」



「このカレーライスうまいね！」



（旺文社「第６回ことばに関するアンケート」による）

【資料Ⅱ】 役割語の定義

役割語について、金水敏『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』（岩波書店、二〇〇三年、二〇五頁）では次のように定義している。

　ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。

すなわち、特定の話し方あるいは言葉遣いと特定の人物像（キャラクタ）との心理的な連合であり、(注)ステレオタイプの言語版であるとも言える。役割語の分かりやすい例として、次のようなものを挙げることができる。

a　おお、そうじゃ、わしが知っておるんじゃ。
b　あら、そうよ、わたくしが知っておりますわ。
c　うん、そうだよ、ぼくが知ってるよ。
d　んだ、んだ、おら知ってるだ。
e　そやそや、わしが知ってまっせー。
f　うむ、さよう、せっしゃが存じておりまする。

上記の話し方はいずれも論理的な内容が同じであるが、想起させる話し手が異なる。例えばaは男性老人、bはお嬢様、cは男の子、dは田舎もの、eは関西人、fは武士などの話し手が当てられるであろう。

（金水敏（きんすいさとし）「役割語と日本語教育」『日本語教育』第一五〇号による）

（注）　ステレオタイプ――型にはまった画一的なイメージ。紋切り型。

【資料Ⅲ】　役割語の習得時期

多くの日本語話者は、「あら、すてきだわ」「おい、おれは行くぜ」のような言い方が女性や男性の話し方を想起させるという知識を共有している。しかし、現実の日常生活の中でこのようないかにも女性的、いかにも男性的というような表現は今日の日本ではやはりまれになっている。

日常的な音声言語に、語彙・語法的な特徴と性差に関する積極的な証拠が乏しいにもかかわらず、多くのネイティブの日本語話者は、〈男ことば〉と〈女ことば〉を正しく認識する。むろんこれは、絵本やテレビなどの作品の受容を通して知識を受け入れているのである。この点について考えるために、私が代表者を務める(注)科研費の研究グループで、幼児の役割語認識の発達に関する予備的な実験調査を紹介しよう。図1として示すのは、その実験に用いたイラストである。

この図を被実験者の幼児に示し、さらに音声刺激として次のような文の読み上げを聞かせ、絵の人物を指し示させた。

a　おれは、この町が大好きだぜ。
b　あたしは、この町が大好きなのよ。
c　わしは、この町が大好きなんじゃ。
d　ぼくは、この町が大好きさ。
e　わたくしは、この町が大好きですわ。

その結果、三歳児では性差を含む役割語の認識が十分でなかったのに対し、五歳児ではほぼ完璧にできることが分かった（音声的な刺激を用いたので、語彙・語法的な指標と音声的な指標のどちらが効いていたかはこれからの検討課題である）。

幼児が、これらの人物像すべてに現実に出会うということはほとんど考えにくい。これに対して、幼児が日常的に触れる絵本やアニメ作品等には、役割語の例があふれている。

（金水敏「役割語と日本語教育」『日本語教育』第一五〇号による）

（注）　科研費――科学研究費補助金の略。学術研究を発展させることを目的にする競争的資金。

図1　役割語習得に関する実験刺激

問１ **【レポート】**の空欄 X には、**【レポート】**の展開を踏まえた**【資料Ⅰ】**の説明が入る。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 1 。

① 「このバスに乗ればいいのよね？」を使わない女子は六割近くにのぼり、「このカレーライスうまいね！」を使わない男子は二割を超えていること

② 「このバスに乗ればいいのよね？」を使う女子は三割程度にとどまり、「このカレーライスうまいね！」を使う女子は三割を超えていること

③ 「このバスに乗ればいいのよね？」を使わない女子は六割近くにのぼり、「このカレーライスうまいね！」を使わない男女は四割近くにのぼること

④ 「このバスに乗ればいいのよね？」を使わない女子は六割近くにのぼり、「このカレーライスうまいね！」を使うか分からないという女子は一割程度にとどまっていること

メモ欄

問２　**【レポート】**の空欄 Y には、**【資料Ⅱ】**及び**【資料Ⅲ】**の要約が入る。その要約として最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 2 。

① イラストと音声刺激を用いた発達段階に関する調査によって、役割語の認識は、五歳でほぼ獲得されることが明らかになったが、それは絵本やアニメといった幼児向けのフィクションの影響である

② 役割語とは、特定の人物像を想起させたり特定の人物がいかにも使用しそうだと感じさせたりする語彙や言い回しなどの言葉遣いのことであり、日本語の言葉遣いの特徴を端的に示した概念である

③ 年齢や職業、性格といった話し手の人物像に関する情報と結びつけられた言葉遣いを役割語と呼び、私たちはそうした言葉遣いを幼児期から絵本やアニメ等の登場人物の話し方を通して学んでいる

④ 日本語話者であれば言葉遣いだけで特定の人物のイメージを思い浮かべることができるが、こうした特定のイメージが社会で広く共有されるに至ったステレオタイプとしての言語が役割語である

メモ欄

問３　**【レポート】**の空欄 Z には、役割語の例が入る。その例として**適当でないもの**を、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 3 。

① 家族や友だちに対してはくだけた言葉遣いで話すことが多い人が、他人の目を意識して、親密な人にも敬語を用いて話し方を変える場合が見受けられる。

② アニメやマンガ、映画の登場人物を真似るなどして、一般的に男性が用いる「僕」や「俺」などの一人称代名詞を用いる女性が見受けられる。

③ ふだん共通語を話す人が話す不自然な方言よりも、周りが方言を話す環境で育てられた人が話す自然な方言の方が好まれるという傾向が見受けられる。

④ 「ツッコミキャラ」、「天然キャラ」などの類型的な人物像が浸透し、場面に応じてそれらを使い分けるというコミュニケーションが見受けられる。

メモ欄

問４　ヒロミさんは、**【レポート】**の主張をより理解してもらうためには論拠が不十分であることに気づき、補足しようと考えた。その内容として適当なものを、次の①〜⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［４］・［５］。

①　「今日は学校に行くの」という表現を例にして、日本語における役割語では語彙や語法より音声的な要素が重要であるため、文末のイントネーションによって男女どちらの言葉遣いにもなることを補足する。

②　英語の「Ｉ」に対応する日本語が「わたし」、「わたくし」、「おれ」、「ぼく」など多様に存在することを例示し、一人称代名詞の使い分けだけでも具体的な人物像を想起させることができることを補足する。

③　マンガやアニメなどに登場する武士や忍者が用いるとされる「〜でござる」という文末表現が江戸時代にはすでに使われていたことを指摘し、役割語の多くが江戸時代の言葉を反映していることを補足する。

④　役割語と性別、年齢、仕事の種類、見た目などのイメージとがつながりやすいことを踏まえ、不用意に役割語を用いることは人間関係において個性を固定化してしまう可能性があるということを補足する。

⑤　絵本やアニメなどの幼児向けの作品を通していつの間にか認識されるという役割語の習得過程とその影響力の大きさを示し、この時期の幼児教育には子どもの語彙を豊かにする可能性があるということを補足する。

メモ欄

⑥ 役割語であると認識されてはいても実際の場面ではあまり用いられないという役割語使用の実情をもとに、一人称代名詞や文末表現などの役割語の数が将来減少してしまう可能性があるということを補足する。

「大学入学共通テスト」２０２５年度試作問題より

メモ欄

■2025年度 試作問題

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第A問（20）	1	1	1	3
		2	2	3
	2	3	3	5
	3	4	3	4
		5	2	5
第B問（20）	1	1	2	4
	2	2	3	3
	3	3	3	3
	4	4－5	2－4	10（各5）

（注）－（ハイフン）でつながれた正解は、順序を問わない。

巻末付録

読解法一覧

読解法1　文の構造

文を読むときは「主部と述部」「修飾部と被修飾部」「接続部と文」という文の構造に気をつけよう。

《分析記号》
主部　＝　〈とんがりカッコ〉を付ける
修飾部　＝　［四角カッコ］を付ける
接続部　＝　／スラッシュで文を切る

読解法2　指示語・接続表現

文を読むときは「指示語」と「接続表現」に気をつけよう。「指示語」があれば「指示内容」を捉え、「接続表現」があれば「前後のつながり」に注意する。また、本講座では「論理的なつながり」を強調するため、「接続詞」「接続語」ではなく「接続表現」という表記で統一する。

《分析記号》
指示語　＝　⬭で囲む
接続表現　＝　⬭で囲む

「指示語」のカテゴリー

①「指示語」

前の名詞や説明を指す。

「これ」「それ」「あれ」　指示語（指示代名詞）
「この」「その」「あの」　指示語（指示連体詞）

②「一般化の指示語（まとめの指示語）」

前の具体例や詳しい説明をまとめる働きがある。指示内容は前に書かれている説明を幅広く捉える必要がある。

「このような」「そのような」「こういう」「そういう」

「接続表現」のカテゴリー

①「解説」

前の語や文や段落を詳しく説明したり、要約的にまとめたりする。

「つまり」「つまるところ」「すなわち」
「要するに」「畢竟（ひっきょう）」「結局」
↓要約的な言い換え

「言い換えれば」「換言すると」
↓言い換え

「いわば」
↓改まった表現（比喩表現・個人言語）への言い換え

②「例示」

前の内容の具体例を引いたり、一部を強調したりする。

「例えば」「言ってみれば」
↓読者の理解のための具体例を引く
「とりわけ」「なかんずく」
↓全体の中から一部を取り出して強調する

③「理由」

前の文に対する理由を説明する。

「なぜなら」「というのは（も）」
↓評論文に多い
「けだし」「だって」
↓小説文・随筆文に多い

④「帰結」

前の文からの結果・結論を示す。（順接が多い）

「だから」「したがって」「それゆえ」
「ゆえに」「よって」「それで」
「そこで」「すると」「そして」
（因果関係がない場合もある）

⑤「転換」

前の主張や主題を転換する。

「しかし」「だが」「ところが」「とはいえ」「さりとて」
「それでも」「それなのに」「それにしても」「けれども」
「けれど」
↓「主張」の方向転換（逆接）

「さて」「ところで」「閑話休題」
↓「主題・話題」の転換

⑥「付加」
前の内容に別の内容を付け加える。

「さらに」「しかも」「そのうえ」「加えて」
「また」「および」「かつ」
「だけでなく」「のみならず」
↓単純な付け加え

「一方」「他方」「もう一方で」「他方で」
↓対照的な内容を付け加える

⑦「補足」
反対の内容を補足する。

「ただし」「もっとも」

⑧ **「選択」**

前の内容と後の内容のいずれか一方を選択する。（両方の場合もある）

「または」「あるいは」「もしくは」「ないし（は）」「それとも」

読解法3 文の関係

文を読むときは「同値（イコール）」「対立」「因果」「包摂（抽象・具体）」という関係に注意する。「文の構造」「指示語」「接続表現」といった形式、および「言葉の意味」といった内容の両面から「文の関係」を捉える。

《分析記号》

① 同値関係　A ＝ B
② 対立関係　A ⇔ B
③ 因果関係　A → B
④ 包摂関係　A ― a'

読解法４　レトリック（説得話法・修辞法）

筆者は自分の主張を理解してもらうだけでなく、納得してもらえるように様々な方法を用いて工夫をしている。その工夫が「レトリック（説得話法）」である。文を読むときには「レトリック」に気をつけよう。

①「問題提起」

読者に疑問を投げかけて意識を誘導し、答えとして自説を述べる。「疑問文」があったら、そのあとに「答え」が来ることを予想しながら読もう。

《分析記号》　波線を引く
「疑問文」→「◎答え（自説・持論）」

②「具体例」「体験談」

読者がイメージしやすいような例を挙げる。また、実感を込めるために体験談を挙げる。これらは筆者の主張を伝えるための手段なので、（丸カッコ）で括りながら常に「筆者の主張」を意識して読もう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る
「◎主張」→（△具体例、体験談）→「◎まとめ」
抽象　→　具体　→　抽象

③「引用」

筆者が別の文章の筆者と対話しながら文章を展開することがある。二人で議論を進めることにより、論を深めるためである。引用は筆者の主張に対して「同意見」「反対意見」「根拠」「具体例」となるものがある。引用も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

> **《分析記号》（丸カッコ）で括る**（引用）
> **（△引用）→「◎筆者の説明・解釈」**

④「比喩」

内容のイメージを喚起しやすくするために別のものに喩（たと）える。

> **《分析記号》□で囲む**
> **直喩　＝　「ような」「みたいな」をつけて喩える**
> **隠喩　＝　「ような」「みたいな」をつけないで喩える**
> **擬人法　＝　人でないものを人に喩える**
> **類比　＝　同じグループ内の別のものに喩える**

⑤「譲歩」

一般論や反論に一旦は理解を示しながらも、方向転換をして自説・持論を展開する。

《分析記号》（　）で囲む
「確かに」「もちろん」「なるほど」「むろん」→△一般論・反論
「しかし」「だが」「けれど」→◎自説・持論

読解法5　論理フレームワーク

筆者は自分の伝えたい内容を定義・整理・分類することで、内容を正確に相手に伝えようとする。あらゆる筆者に共通する整理の仕方が「フレームワーク」である。内容を正確につかむためにも「論理フレームワーク」に注意しよう。

《分析記号》（　）で囲む

①「否定」のフレームワーク

Aではなく、（ではない。）Bである
Aより（ではなく）むしろB
Aのようで実はB

※AとBが反対の内容になる場合が多い。
※Bに筆者の主張が来ることが多い。

②「条件法」のフレームワーク

AならばB（AはBである）
Aの条件（前提、本質、基本）はBである
Aは常に（必ず、絶対）B
すべてのAはBである（全称文）
AのためにはBでなければならない
（AのためにはBである必要がある）
BでないならばAでない
B以外にはAはない
Bのときのみ（だけ、に限り）A

Ｂしてはじめて（してこそ）Ａ

※主張（命題）を表す。
※Ａは十分条件、Ｂは必要条件を表す。
※「ＡならばＢ」の否定は「Ａは必ずしもＢとは限らない」である。
「ＡであってＢでない」ような「反例」が挙げられる。

③「連言」のフレームワーク

Ａかつ Ｂ
Ａさらに、そのうえ、加えて、Ｂ
Ａだけでなく、（だけではない。）Ｂも
Ａのみならず、Ｂも
Ａと（や）Ｂ
Ａつつ、ながら、同時に、ともに、Ｂ

※Ａという主張とＢという主張が同時になされている。
※「ＡかつＢ」の否定は「Ａでない、またはＢでない」となる。（ド・モルガンの法則）

④「選言」のフレームワーク

Aまたは B
Aあるいは B
Aもしくは、B
Aないし（は）B
Aか（や）B

※Aという主張かBという主張のうちどちらか一方（または両方）がなされている。
※「AまたはB」の否定は「Aでない、かつBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

⑤「差異（対比）」のフレームワーク

AはXであるのに対し、BはYである
AはXであるのとは異なり（違って、別に、逆に）、
BはYである

※AとBの相違点を説明する。
※XとYは反対の内容になる場合が多い。

⑥「変化」のフレームワーク

AからBへと変化する AだったものがAでなくなる

※AとBは反対の内容になる場合が多い。

⑦「類似（類比）」のフレームワーク

AはXである。Bも（また）Xである AとBはともにXである Aと同様にBも（また）Xである AとBはXという点で同じである

※AとBの共通点を説明する。

⑧「逆説」のフレームワーク

Aすると、かえってB
Aと同時にB

※AとBは反対の内容になる。
※一見矛盾しているように見えるが真である。

⑨「因果」のフレームワーク

AだからB
AなのでB
AによってB
AのためB

※AとBに因果関係がある。

読解法6　論証のフレームワーク

筆者は自説を主張するが、その主張は読者にとって飛躍があったり、常識に反する内容であったりする。そこで、筆者は読者に納得してもらうために「論証（証明）」を行う。その「論証」を読むために「論証のフレームワーク」に注意しよう。

①単純な論証

A（○根拠）→B（◎結論）

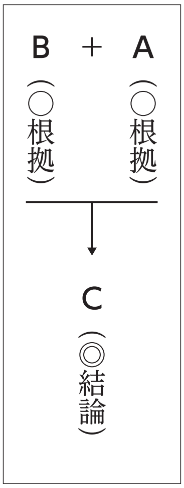
※根拠Aから結論Bが導かれている。

②論証の連鎖

A（△根拠）→B（○根拠）→C（◎結論）

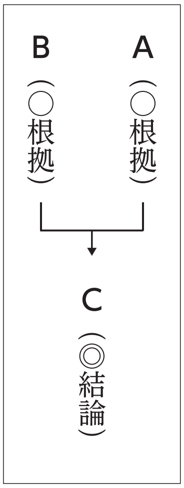
※主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

③結合論証



※主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。
※AかBかどちらか一方がもしないならば、この論証は成立しなくなる。

④合流論証



※根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。
※AとBはそれぞれ単独でも根拠になる。

読解法7　心情のフレームワーク

小説文や随筆文では登場人物や作者の「心情」が問われる。「心情」を捉える際にはその心情が発生する「原因」まで捉える必要がある。そこで、「心情」を捉えるための「因果関係」を「心情のフレームワーク」として覚えよう。

①単純な心情

原因 → **心情** → **結果**
（事態、事情）　　（行動、反応、発言）

※「心情」部分が書いてない場合は「原因」と「結果」から推測する。

②心情の変化

心情A →（変化）→ **心情B**
↑
変化の原因

※心情Aから心情Bへの変化を捉える。
※心情は反対のものになる。
※「心情A」「心情B」「変化の原因」の三点を捉える。

③結合原因の心情

原因A（外的）
＋
原因B（内的）
→ **心情** → **結果**

※原因Aと原因Bが組み合わさって「心情」が発生する。
※原因Bは特殊事情であることが多く、「セリフ」「心中文」「過去のシーン」によって明らかになることが多い。

④心情の交錯

原因Ａ　→　心情Ａ
＋
原因Ｂ　→　心情Ｂ
→　結果

※心情Ａと心情Ｂが同時に存在する。
※心情Ａと心情Ｂのそれぞれに「原因」がある。
※心情Ａと心情Ｂは相反する心情である場合が多い。

傍線部内容説明問題解法「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。

・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。

・指示語
・比喩表現
・個人言語

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

①「文構造」の分析について

★文法的構造

・主語（主部）—述語（述部）
・修飾語（修飾部）—被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
・接続助詞や連用中止法
・倒置や省略

★論理的構造

・否定　・差異（変化）
・連言　・類似（アナロジー）
・選言　・逆説
・条件法　・因果

設問を解く際には、まずは傍線部（または傍線部を含む一文）の統語論的「構造」を分析することからスタートする。この構造を正確に分析して、なるべく元の構造を生かして、解答を構成するためである。ただし、日本語の慣習的統語規則を鑑みて、受動態から能動態に変換するなど元の構文を変形する場合もある。

②「ポイント」になる語句について

★ 指示語（代名詞）

㊈ これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように　など

㉹ 前者、後者、両者、右の、彼　など

★ 比喩表現 ＝ 直喩、暗喩、メタファー、レトリック　など

★ 個人言語 ＝ 筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語

③「解答の根拠」となる部分との対応について

★ 同値関係

★ 対立関係

★ 因果関係

★ 包摂関係（抽象と具体の関係）

以上の関係がある部分と対応させる。

このような関係で対応した部分が、記述解答を書く際の「解答の根拠」となる。

傍線部理由説明問題解法「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

←

②「ポイント」を把握する。
・A → x
（飛躍している部分）

←

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ「A↓x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A↓x」という飛躍した部分がある。まずは、どこに飛躍があるかを見つけよう。

①主語（主部）↓述語（述部）に飛躍がある場合。
②修飾部（接続部）↓被修飾部（被接続部）に飛躍がある場合。

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探す。
※「x」は、「なぜ『～』か」というように設問が指定している場合もある。

Ⅱ 論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となる。「A↓x」のAの説明を求めよう。

Ⅲ　論証のフレームワーク

①「単純な論証」　A → B

根拠Aから結論Bが導かれている。

〈例文〉すべての動物は呼吸をする。　**根拠**　A

したがって、　→　**導出**

犬は呼吸をする。　**結論**　B

※実はこの導出に必要な前提として、「犬は動物である。」というものがある。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要がある。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」という。

②「論証の連鎖」　A → B → C

主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

〈例文〉　このカフェはコーヒー豆の品質にこだわっている。　**根拠A**

そのため、　→　**導出**

コーヒーの味が非常に良い。　**根拠B**

だから、　→　**導出**

多くの客がリピートしている。　**主張C**

※この形が「論証」の中では一番多い。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になる。
その前の文は「根拠」となる。

③「結合論証」

B ＋ A
↓
C

主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。

〈例文〉

もしこの植物に毎日水をやらなければ、花は咲かない。　**主張A**

＋　**結合**

今、この植物の花が咲いている。　**主張B**

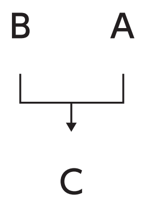
＝　**根拠**

したがって、　← **導出**

この植物に毎日水をやったということだ。　**主張C**

※先に説明した「隠れた前提」がある場合、この結合論証となる。
この形も「理由説明問題」ではよく出題される。

④「合流論証」



根拠Aだけでなく根拠Bもあり、主張Cが導かれる。

〈例文〉この学習塾は個別指導が充実している。　**根拠 A**

また、

使用する教材も最新のカリキュラムに対応している。　**根拠 B**

だから、　← **導出**

生徒の学力向上に大きく貢献している。　**主張 C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になる。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多い。

Ⅳ 論証を捉えるヒント

A 帰結の接続表現

「だから」「したがって」「よって」
「それゆえ」「ゆえに」
「それで」（「そこで」）

B 理由の接続表現

「なぜなら」「というのは（も）」
「けだし」「だって」

C 助詞など

「～から」「～ので」「～ため」「～より」
「～のだ」「～のである」

→ ～が原因・理由を表す

D　直接表現、比喩表現など

「理由」「原因」「結果」「帰結」「結論」
「～から生じる」「～に根ざしている」
「根源」「背景」など

傍線部心情把握問題解法「心情」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
- 文法的構造
- 論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
- 原因 → 客観的事態や主観的事情
- 心情 → ⊕心情や⊖心情
- 結果 → 行動や反応や発言

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ　単純な心情

原因 → 心情 → 結果

※心情把握問題の基本形。
※この場合は心情が書いていないため、原因と結果から挟み撃ちして心情を把握する問題になっていることが多い。

Ⅱ　心情の変化

原因A → 心情A → 結果A → 原因B → 心情B → 結果B

※心情把握問題で一番有名な問題。
※心情Aから心情Bへの変化、そして変化の原因を三点セットで捉える必要がある。

Ⅲ　結合原因の心情

原因A ＋ 原因B → 心情 → 結果

※原因Aだけ捉えて答えようとすると間違いになる選択肢が多い。

※原因Bは**「リード文」「会話文」「心中文」「回想シーン」**などにある場合が多い。

Ⅳ　心情の交錯

原因Ａ→心情Ａ
＋
原因Ｂ→心情Ｂ
→結果

※一番分析が難しい問題。

※心情Ａの原因が原因Ｂになっていたりと、原因の部分を入れ替えての誤答選択肢が多い。

［著作物・参考資料一覧］
第１講　高岡文章「観光は『見る』ことである／ない ――『観光のまなざし』をめぐって」
第２講　河野哲也『境界の現象学』
第３講　蜂飼耳「繭の遊戯」
第４講　原民喜「翳」
第５講　NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』2022 年 12 月号
国立国語研究所『外来語に関する意識調査（全国調査）』
国立国語研究所『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』
第６講　橋爪真弘「公衆衛生分野における気候変動の影響と適応策」
旺文社「第６回ことばに関するアンケート」2009 年
金水敏『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』
金水敏「役割語と日本語教育」『日本語教育』第一五〇号

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。